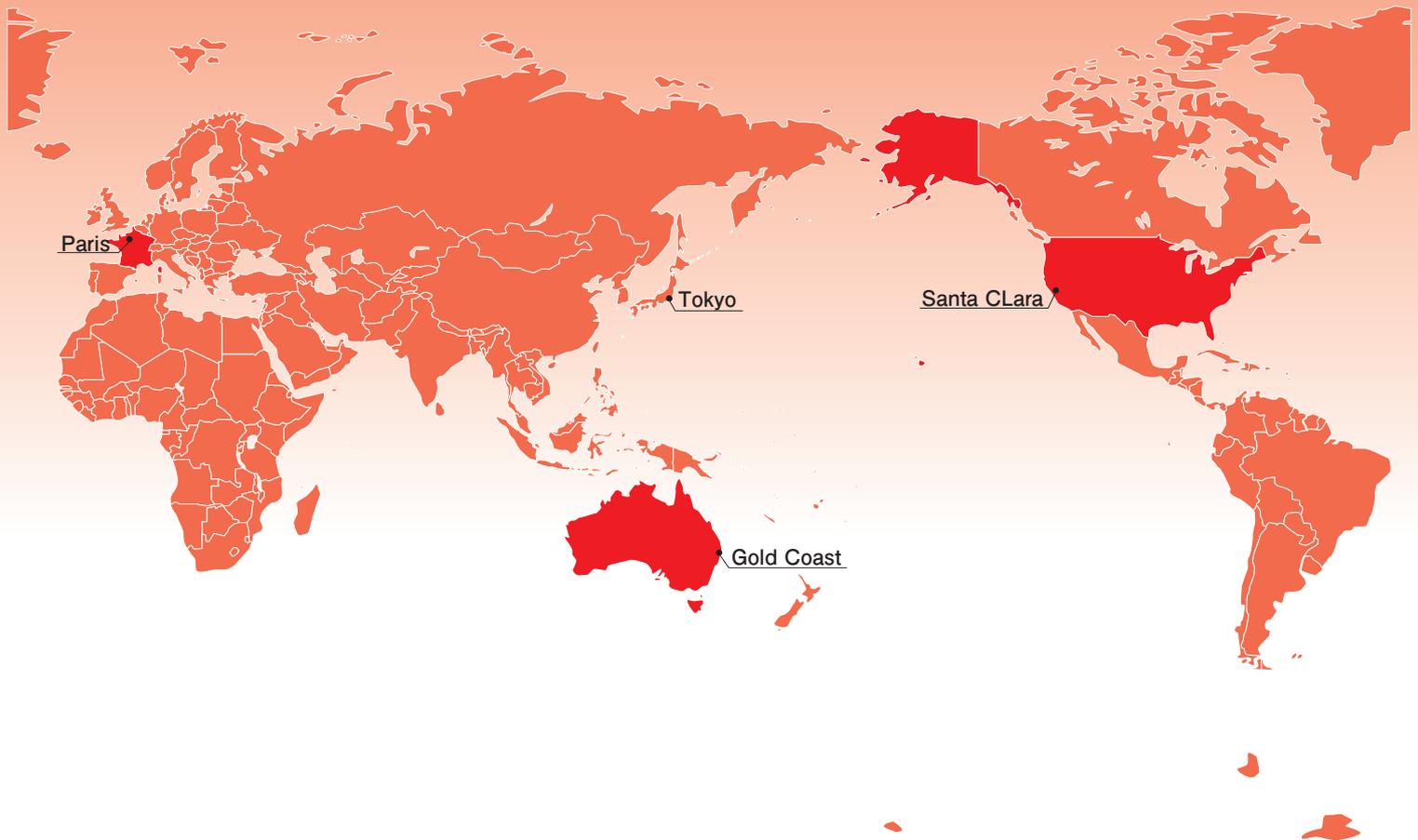


# スポーツ指導者海外研修事業

## 平成19年度帰国者報告書



財団法人 日本オリンピック委員会  
JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE



# スポーツ指導者海外研修事業 平成19年度帰国者報告書目次

## 平成17年度長期派遣（2年）

立花 美哉（水泳／シンクロナイズドスイミング）…………… 3

## 平成18年度短期派遣（1年）

谷澤 英彦（テニス）……………19

岡崎 直人（フェンシング）……………31

### ○平成17年度長期派遣（2年）1名

競技団体	氏名 (フリガナ)	競技・指導実績	研修地	研修期間	研 修 項 目
1 水泳 (シンクロナイズドスイミング)	立花 美哉 タチバナ ミヤ	日本選手権水泳競技大会 ソロ10連覇 デュエット12連覇 01世界選手権 ソロ3位 デュエット1位 00シドニーオリンピック・ 04アテネオリンピック デュエット2位 チーム2位 井村シンクロクラブにて指導	アメリカ (サンタクララ)	H17年10月13日 ～H19年10月13日	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深いアメリカで指導を中心にスポーツマネジメントを学ぶ

### ○平成18年度短期派遣（1年）2名

競技団体	氏名 (フリガナ)	競技・指導実績	研修地	研修期間	研 修 項 目
1 テニス	谷澤 英彦 タニザワ ヒデヒコ	89全日本テニス選手権 シングルス優勝 90デビスカップ日本代表 01～04ユニバーシアードコーチ 05ナショナルコーチ	オーストラリア (ゴールドコースト)	H18年11月30日 ～H19年11月29日	ジュニアからプロ選手までの指導方法
2 フェンシング	岡崎 直人 オカザキ ナオト	00シドニーオリンピック33位 05世界選手権大会コーチ	フランス (パリ)	H18年11月20日 ～H19年11月19日	トレーニング方法全般の修得およびマネージメント



## 研修員報告〈水泳／シンクロナイズドスイミング 立花 美哉〉



平成17年度・長期派遣（水泳／シンクロナイズドスイミング）



### I. 研修題目

主にアメリカ、カルフォルニアにあるSanta Clara Aquamaids Synchronized Swimming Clubにて指導方法を研修。その他、語学学校及びDe Anza Collageにて語学研修、コーチング学ぶ。また、特別研修として試合観戦、他国にての指導など、これらを通じ指導者としての視野を広げる。

### II. 研修期間

平成17年10月13日～平成19年10月13日

### III. 研修地および日程

#### (1) 主な研修先

The Santa Clara Aquamaids Synchronized Swimming Club

#### (2) 受け入れ関係者

- ・ Head Coach : CHRIS CARVER
- ・ Nancy Hines

#### (3) 研修日程

##### ①通常研修

- 1年目 The Santa Clara Aquamaids Synchronized Swimming Clubにて練習見学、コーチの補助、語学学校により語学受講
- 2年目 The Santa Clara Aquamaids Synchronized Swimming Clubにて練習見学、テクニカルアシスタントコーチ、短期大学にて語学、コーチングなどを受講

##### ②特別研修

- 2006年 地区の試合観戦  
アメリカ全国大会の観戦  
ハンガリーにて指導  
FINAワールドカップ観戦兼手伝い
- 2007年 第12回世界選手権 試合観戦  
ナショナルBチーム合宿見学

### IV. 研修概要

#### (1) サンタクララアクアメイツ

##### ①研修先について（クラブ紹介）

研修先であったサンタクララアクアメイツシンクロナイズドスイミングクラブは

1964年に設立。1984年現在のヘッドコーチでもあるChris Caverがクラブの代表者となる。シンクロナイズドスイミングの世界でChris Caverの名は誰もが認知しており、世界において成功を成し遂げたコーチの一人である。彼女は元シンクロナイズドスイミング選手ではなく音楽家（バイオリニスト）だった事から、曲を繊細にとらえる演技を作り上げ、生かす演技構成をするコーチである。彼女の戦いで最も記憶に残るのが、1996年のアトランタオリンピックでアメリカを金メダルに導いたことだ。この年代のアメリカチームは無敵といえるほど誰もが認める最強のチームであり、技術だけではなく、人として魅力にあふれ、誰もが憧れるような素晴らしいチームだった。そのチームメンバーの大半を彼女がジュニアの時代から育て上げ、その最終戦の舞台がアトランタオリンピックになったのである。その後、すべてのメンバーが入れ替わり一時は低迷したものの、2004年アテネオリンピックではデュエット、チーム共に銅メダルに導いている。そして同年サンタクララアクアメイツは40周年を迎え、歴史の深いクラブの一つになった。

シンクロナイズドスイミングがオリンピック種目になったのち、このクラブ出身のオリンピック選手は、アメリカ全体の58%以上をしめている。現在クラブには約60人の選手が所属し、7歳から26歳の選手がそれぞれのレベルや年齢区分によりチームに分けられ、大会を目指している。どの年齢区分であっても所属選手は常に成績の上位を占めており、アメリカで最強のクラブと言えるだろう。

このクラブの特徴は、海外から多くの選手の留学を受け入れていることである。私が研修を受けていた期間もオランダから2人、スイスから2人の選手が練習に参加していた。過去には日本、韓国、イタリア、ロシア、スコットランド、フランス、ドイツ、ニュージーランド、南アフリカの選手達がこのクラブでトレーニングを行っている。

また、このクラブには男子選手が所属しており、女子同様、アメリカ国内の大会では常に成績の上位に入っている。現在シンクロナイズドスイミングではオリンピックなどの国際試合のほとんどが女子種目のみで行われているが、今後、男子選手の層が厚くなれば、男子も実施種目に入ることが考えられ、まだまだ進化の可能性のあるスポーツである。常に男子選手を発掘しているこのクラブは、その様なきっかけを作っているクラブの一つかもしれない。

今回私がアメリカで研修を行った理由の一つは、多くの選手から魅了される最強のクラブを作り上げたChris Caverの指導法を見てみたかったからであり、技術プラス人間性があふれ、情緒のある、人間が心から演じる演技こそが本当の世界一なのではないかと思うからである。人が採点するからこそ、人の心を動かせる演技が今求められている。私が選手だった頃「あんな素敵な選手になりたい」と心から思ったアトランタオリンピックアメリカチーム、そのチームを作りあげたChris Caverを知りたかったからである。

クラブホームページ (<http://www.aquamaid.org/index.php>)

USAシンクロナイズドスイミングホームページ (<http://www.usasynchro.org/>)



## ②チーム存続方法

シンクロナイズドスイミングの選手は主にクラブに属する事が多い。そのクラブは大半がプライベートのクラブチームであり、企業や大学に属するものは少ない（日本、アメリカにおいて）。私も選手時代はクラブチームに所属しており、今回研修を行ったサンタクララアクアメイツシンクロナイズドスイミングクラブも同じくプライベートのクラブチームである。

クラブの大半は月謝制で、その中からプール使用料、コーチ、トレーニング代などをまかなっており、合宿や試合、コスチューム代、その他は追加負担になる。これはどの競技にも言えることだと思うが、競技を行うには経済的な問題もあり、選手の気持ちだけではどうにもならない事がある。そういった問題に対してサンタクララアクアメイツでは、月謝制ではあるが、ビンゴの経営、Fitness and Fun（選手ではない子供達にシンクロナイズドスイミングを期間限定で楽しく学ばせる）、2年に一度のショー（クラブ全体で大掛かりな本格的なパフォーマンスショーを行う）、キャンプ（他クラブからの選手に募集をかけ、サンタクララ出身のオリンピック達が指導に加わり合宿を行う）などを行うことにより、そこで得た収入でクラブの存続、選手の個人負担を助けている。

これらの活動は父兄の協力なしでは成り立たず、父兄の時間の負担はあるが、経済的な負担が軽くなる為、シンクロナイズドスイミングを気軽に習えるチャンスを与えることができ、シンクロナイズドスイミング普及にもつながっている。私がここで学んだ事は、人との絆の深さだ。子供達に夢を追い求める事ができる機会を与える為に、父兄ともども力を注ぎ、クラブを支え、クラブを愛している。その一つ一つが、選手の人間性を作り上げているのかも知れない。

## ③トレーニング環境と教育

私は主にAチーム（16歳以上でほとんどが代表選手に選ばれるシニアの選手＋ジュニアの優秀な選手）の練習に参加し、研修の後半はBチーム（ジュニアの15歳から17歳）の練習に参加したが、クラブの施設は主に4つのプールが使い分けており、チームにより練習時間、練習場所が違う為、すべてのチームが一緒になり練習する事はない。

練習環境に関しては、日本のクラブ同様、ホームプールがない為、いつでも自由に使えるプールがなく、練習時間、練習場所を選ばなければならない。この点に関しては私が現役だった時の環境と何の変わりもない。日本では基本的に高校生までは朝学校に通学し、その後練習に参加するが、サンタクララアクアメイツでは学校ではなく練習時間を中心とした形がとられており、Aチームの練習開始時間は朝6時からとなっている。これはこの時間帯の練習環境が一番よいからであり、午後になるとダイビングプールをダイビングの選手と共同で使わなければならない、プールが半面しか使えないからである。そのため、Aチームにいる選手たちは朝学校に通う事ができず、通常の高校生活を選ぶか、ホームスクールで学習し、シンクロナイズドスイミング選手としての生活を選ぶかどちらを選択することになる。研修期間中に知り合ったジュニア選手はAチームに入れる実力はあったのだが、ホームス

クールにするか、通常の高校生活をとるか、大きな決断をすることになった。彼女は通常の高校生活を送りたかったのだ。学業を学ぶと言う点ではそれぞれ違う利点はあると思うが、学校に通わなければ学べないものもあるだろう。彼女はBチームに属する事を決め、通常どおりに学校に通っている（Bチームは主に午後から練習）。Bチームはもちろん技術のレベルがAチームより劣る。ここで、学業との両立が非常に難しいことがわかる。選手が強くなればなるほど、練習だけでなく、試合、代表選手合宿などシンクロナイズドスイミングに費やさなければならない時間が増す。学業との両立の難しさはアメリカに渡っても感じたことであった。ホームスクールは自分にとってなじみが薄かった為、彼女達の状況を知った時、衝撃を受けた。使用する施設、時間、選手との間でまだまだ困難なことが沢山あることは間違いない。選手でいられる時間は人生の一部である。だからこそ、集中し、できるだけの努力は惜しみたくないだろう。しかし、その後の人生にどう左右するのか。どのような形が選手にとって一番いい形なのか、考えさせられる一面だった。

#### ④練習方法と時間の兼ね合い

練習時間を比べてみる

（サンタクララアクアメイツ 2007年シーズン参考）

- ・週6日
- ・月曜～土曜日
- ・6：00～11：30又は12：00

これが基本の練習時間である。個人種目を持っている選手は時期により午後（2部練習）からも練習が行われる。自分が選手だった頃に比べると通常練習の時間は非常に長い。

では、自分が現役だった頃の通常練習時間（クラブでの日常練習）を示してみる。

（水中練習のみ その他のウエイトトレーニング、ダンストレーニング等は別時間）

（自身の現役時代 参考）

- ・週5日～6日（プール状況により異なる）
- ・17：30～21：00（平日）
- ・週末は2部練習になる事が多い（例 9：00～16：30）

これは水中練習だけを比べているのだから、サンタクララアクアメイツの練習時間は断然時間が長い事がわかる。私がこちらに来た当初、練習時間のつかい方、練習の内容に大きな差を感じた。

日本の場合、短時間で密度の非常に濃い練習を行うのに対し、サンタクララアクアメイツの場合は時間をゆったりとつかい、時には時間がもったいないのでは？と感じる一面があるくらいであった。サンタクララアクアメイツでは週6日1日平均



6時間かけてやることを、自分のクラブの場合は（自身の現役時代）週5～6日1日3時間半平均でやりきる。約4時間弱の練習で一息つく暇もないくらい、集中しなければならない。

では、時間での練習配分を示してみる

（例1 私が現役時代）

17：00～ スピードスイム（\*時期（内容）により時間の長さは変わる）  
 18：00～ ストレッチ、基礎練習、規定要素練習  
 19：00～21：00 演技構成

（例2 サンタクララアクアメイツ）

6：00～ アップなど  
 7：30～ ストレッチ、規定種目の中の要素練習など（この時間内に10～15分程度、スナックをとったりする時間がある）  
 8：30～11：30（12：00）演技構成

これは一例に過ぎないが、比較してみるとサンタクララアクアメイツの場合は基礎練習の時間が非常に短い。ウォームアップ後すぐに演技構成に入る日もあり、その日は基礎練習をしない。しかし日本の場合は、基礎練習にかなり重点を置いている。なぜなら、水中で真っ直ぐな倒立（vertical position）が正しくとれなければ、演技に組み込まれているあらゆる足技は正確にできないと考えているからだ（日本は技術の正確性を得意とする）。基本がなければ、規定要素も正確にできない。そしてそれは、足技の「切れ（sharp）、高さ、演技のクリアーさ」につながると考えるからだ。平均的に日本の場合、少なくとも最低1時間は基礎練習をする。しかし、アメリカでも重要視してはいるものの、求め方は日本に比べあいまいな部分がある。

そしてこれは子供達を教える時にも違いが出ている。まず、どのように指導をスタートさせるか。日本の場合、大抵が一から基本を細かく教え込む。例えば、どの様に身体をしめるか、スカーリング（手の水中での動き）をどのように使うか。その反面、アメリカは「じゃ 浮いてみよう、じゃ 足上げてみよう」と言う感じで細かい事はあまり教えない場合が多い。遊びの中から学び、Funの部分を必ず残す。教え込むと言うよりも、楽しませる事に重点を置く。しかし私が思うのはジュニアの時代に身についた癖をシニアになってから修正する事は非常に難しい。

近年、日本はアメリカに勝る技術の正確性を持っているといえるのであろう。どこにこだわり、何に重点を置くか。これも指導をする上で非常に重要になってくる。

サンタクララアクアメイツの場合、ほとんどの時間を演技構成に費やす。例えば一つの振り付けに3時間、一つのリフトに3時間をかけることが通常である。このクラブの場合、演技の内容はすべて水の中で作り上げる。真っ白な何もないところから、曲を聴きながら振り付けを一から水中で始める。日本の場合はまず練習時間外に陸上である程度の内容を考える。もちろん陸で考えたものをそのまま使うことはなかなかできないが、曲かけ練習が始まったその瞬間から選手は動けるのである。

陸上で考えていた内容をまずやってみる。そして、そこから新しいものを付け加えたり、違うアイデアにしてみたり、練習の展開を早くする事ができ、時間を無駄にせず、確実にどんなことをしたいのか方向性を決めていく事ができる。その反面サントクララアクアメイツは水中で一から曲を皆で聴くところから始まる。そこからなんとなく動きを入れ始め、コーチが頭の中にあるアイデアをやってみる。そして一つの演技の方向性が決まるまでに何日間もかける。時間に余裕のない日本の場合、必然と練習内容は密になり、空白の時間なく、どれだけ効率よくできるかが求められる。しかしサントクララアクアメイツの場合は練習時間の違いなどからか、何も進まない空白の時間もあるのだ。そして時に和やかな空気が練習中にながれる。

それぞれに利点があり、そこからうまれる特徴がある。私が現役で経験してきたものと違う練習の雰囲気、時間の使い方、こだわる点の違い。自分が知っているものと、違う観点から見られたことは非常に貴重な経験である。改めて日本の優れているところ、アメリカの利点を新たに感じ取る事ができた。違いを知る事は自分の視野を広げ、あらゆる方向から指導できる方法を知るチャンスである。

(アメリカの利点)

- ・一つの演技やリフトに何日間もかけることにより、新しいものを発見する余裕ができる
- ・練習中の和やかな雰囲気は時に選手に開放感を与え、自由さを感じさせる

(日本の利点)

- ・練習の進行の早さ 無駄の感じられない時間の使い方
- ・練習内容にはっきりと目的が見え、選手が空白の時間を持つことがない

日本の場合、リフトを考えるのに一日かけることはほとんどないが、こちらのクラブではたっぷりと時間を使い体操のコーチに指導を受けたりしている。これによりいつも目新しいものを演技の中に組み込んでくる。以前から日本が世界に劣っているのはリフトの目新しさである。何かを発見する為には、時にたっぷりと時間を使うことも必要なのかもしれないと感じた。

#### ⑤意識改革

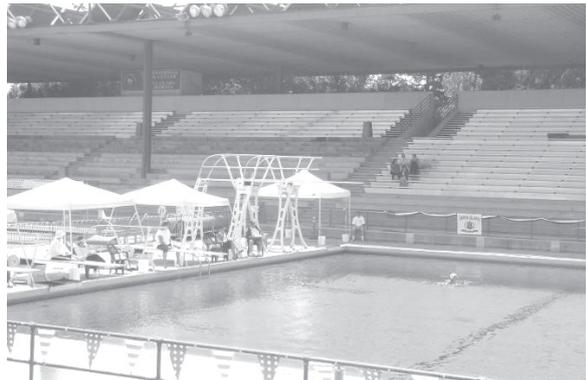
サントクララアクアメイツでは所属選手、コーチに対し意識改革のヒントを与える為、様々な方法がとられている。その一つとして外部から専門の講師を招いて講演が行われており、例えば栄養についての講演では、栄養士から1日の栄養の最低摂取量、水分、エネルギー補給のタイミング（練習時）、ダイエットについての講義があり、選手、コーチからの質問に随時答えながら話は進められる。日本では、クラブでこの様な試みを行っているところは少ないであろう。また、コーチに対し、コーチングやスポーツ哲学についてのミーティングも行われており、現場で指導を実践しながら、理論を同時に学べた事は自分にとってとてもプラスになった。同時に私はディアンザカレッジにてコーチングの授業を受講したが、どのようにゴール



をセットし、どのようにモチベーションを保ち、どのようにコーチング哲学をもつかを学ぶことができ、自分が選手だった頃、コーチから与えられた事が自分にどのように影響していたのかを見つめ直す良い機会になった。

講演による意識改革の時間は頻繁には取れないが、日常になりつつある練習にどのように新しい空気を吹き込み、意識を改めさせるが指導をする上で大きなポイントになるだろう。

⑥ジュニアナショナル選考会観戦（2006年5月25日～27日）



試合は5月25日から27日サンタクララインターナショナルプールにて行われた。今回の選考会は新しい選考方法が取り込まれ、とても興味深いものであった。日本と同じく規定種目（フィギュア）、ルーティンセット（ラップごとにエレメンツを組み込まれたもの）、ルーティンの3つの種類で採点

された。これは日本でとられている方法と大きく変わらないが、ルーティンについては新しい選考方法が取り入れられていた。通常、日本では演技内容が収められたビデオテープが、前もってクラブごとに送られ、それをみて選手たちは約1ヶ月～1ヶ月半練習し試合に臨むが、今回の選考方法は、午前中に集合した選手たちに数時間で1つのルーティン（演技 約2分程度）を覚えさせ、その演技で試合に臨ませるといったものであった。これはいかに早く順応できるか、適応性が求められるというものである。演技中にわからなくなってしまう、途中止まってしまう選手が多々みられた。果たしてこの方法が必要かどうかは疑問だが、低迷しつつあるアメリカジュニア選手のレベルアップをはかろうとしているのだろうと感じた。アメリカが王者であったアトランタオリンピックの頃の選手は、ジュニアの大会を制した選手たちである。そう考えるとジュニア時代の強化は非常に重要な事だとわかる。

今回群を抜いて技、アピールすべての面で目を引いた選手は男子選手であった。彼は現在サンタクララに所属しており、シニアの大会でも上位をとれる選手である。現在男子選手の層は非常に薄い。その為、主な国際大会は女子種目になっている。しかし、もし今後男子選手の層が厚くなれば、フィギュアスケートの様にペアと言う新しい種目にも期待ができる。これはシンクロナイズドスイミングがもっとメジャーになる一つの方法かもしれないと感じた。

⑦Senior National 観戦兼手伝い（2006年4月27日～29日）

フロリダにてシニアナショナル（2006 U.S. NATIONAL CHAMPIONSHIPS）が行われた。今回はサンタクララクラブに同行する形となった。この大会は始めにナショナル選手選考会が行われたが、日本の選手選考会と比べると、とてもシンプルな課題で選考会が行われた。エレメンツといわれる規定種目だけを審判の前で行

い、得点は審判がそれぞれ書き留める形で、こちら側には一切詳細はわからないが、非常にシンプルなので、これで果たして順位がはっきりつくのかという疑問感じた。そこでサンタクララのコーチに尋ねたところ、コーチたちもこの選考会には疑問を感じているようで、反対に日本の選考会について質問された。



その後、ルーティンの試合が始まった。日本選手権をイメージしこちらに来たのだが、日本選手権とは全く雰囲気が違った。第一にメディアが一切入っていないこと。日本選手権では沢山のメディアが入り、これが世間の方にシンクロナイズドスイミングを観ていただく機会になっている。しかし、テレビ放送は一切なく、アメリカに来た当初コーチから言われたように、アメリカではシンクロナイズドスイミングはまだマイナースポーツである。これはメディアへの露出が非常に少ない事も関係しているのだろう。

そして第二に、ほとんど観客が入っていないこと。観客席はほとんどなく、プールサイドはほとんどが関係者で埋まっており、一般の観客はいないのでと感ずるくらいである。選手は自分の為に戦っているが、それを応援してくださる方々にやはり観ていただきたい、そして一人でも沢山のの方にシンクロナイズドスイミングを知って頂きたいという思いもある。その様な面で、日本選手権は素晴らしい環境と言えるだろう。

試合運びはサンタクララが有利ではないかと感じていたが、デュエットではペナルティーを取られ2位に終わった。何故サンタクララが客観的に観て有利だと感じたか。

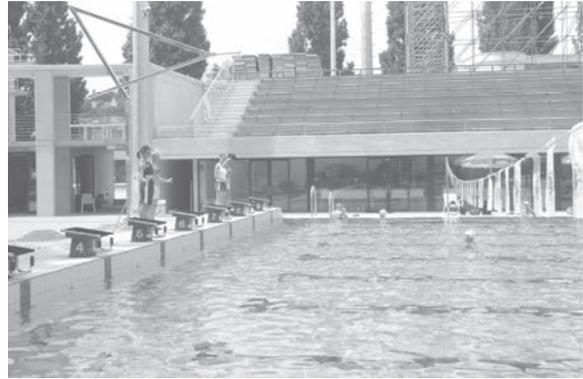
それは舞台に立ったときの立ち姿だ。シンクロナイズドスイミングは演技をする前から勝負は始まっている。だからこそ身体を鍛え、作り上げる。そういう意味ではサンタクララの選手達は立ち姿が光っていた。

今回サンタクララチームに同行し、アメリカが現在メダル争いにのりきれない原因が少し見えたように感じた。例えばソロで優勝した選手は戦うライバルがいない。それくらいソリストとして戦える選手がいないと言う事だ。第二に以前、黄金時代と言われたアメリカの選手からすると、一人ひとりのパーソナリティーがはっきりせず、観ていても印象に残る選手が少なかった。そして、同調。これが一番の問題かも知れない。切れがあり、完璧に同調しているものを観れる事はあまりなかった。

現在のようにシンクロナイズドスイミングでロシアがトップに立ってからは、スピード、切れ、同調が重要視されている。そういう意味では、まだアメリカの選手達はトレーニングが必要なかもしれない。スケールはあるが世界の流れに乗る為にはこれをマスターしなければならないだろう。

⑧ハンガリーナショナルチームへの指導について（2006年7月1日～7日）

今回ハンガリーチームからの要請を受け、単独で指導を行う事になった。シンクロナイズドスイミングはハンガリーにとってまだ新しいスポーツである。水球、競泳についてはとても有名なスポーツの一つで数々のメダルを獲得している。始めにハンガリーブダペストに到着し一番驚いた事はプールの数がとても多く、利用者が非常に多いことであった。ハンガリーでは水泳と言うと大変人気のあるスポーツの一つで、ハンガリーには海がないこともプールの数が多い理由の一つとして挙げられている。



チームは7月末に行われるヨーロッパ選手権に向けトレーニングをしていた。チームはまだとても若く、17歳～24歳。シンクロナイズドスイミングを始めて7年という本当に真新しい選手も沢山いた。これは多くの選手が大学入学と共に引退してしまうことによるもので、国からの援助がない為、金銭的にも苦しく、またシンクロナイズドスイミングだけでは生活できない為、シンクロナイズドスイミングを辞め、選手は大学の勉学に集中する。どこの国でも両立が難しい問題になっているようだ。

今回は試合直前での参加になった為、大きく演技構成を変える事はできず、どの様に同調させるか、どの様にしたら切れを出せるかなど、見せ方を主に指導した。

選手達にとっては新しい感覚であった為、後半の練習ではかなり疲労もみられた。日本のシンクロナイズドスイミングでは演技中に沢山のルールを作りロジカルに全てが構成されている。それを一つ一つハンガリーチームに指導するだけで2週間はあっという間に終わった。

コーチからは沢山の質問を受けた。現在のコーチのほとんどは選手の経験がなく、全て資料や、ビデオなどから研究を重ねているという事だった。また、練習中に一度自分が水にはいり、色々な技のビデオ撮りを行った。水中からと水上からとで撮影をされ、基本の手の使い方などを見せた。ここでは、基本的な手のかき方、練習の仕方、日本の試合について、ナショナル選手はどの様に選ばれるか、など練習方法から日本のシステムについてまで質問がたえなかった。

ハンガリーでの指導経験はとても貴重な経験になった。シンクロナイズドスイミング発展途上のハンガリーチームにどの様な影響を与える事ができたか、今後の彼女達の活躍が楽しみだ。

⑨FINA Synchronized Swimming World Cup 2006兼手伝い(2006年9月14日～17日)

横浜国際プールにてFINAシンクロナイズドスイミングワールドカップ2006が行われた。今回派遣先のアメリカから視察として横浜を訪れた。今までは選手としての試合参加だった為、試合全体を感じる余裕はなかった。しかし今回、初めてシン



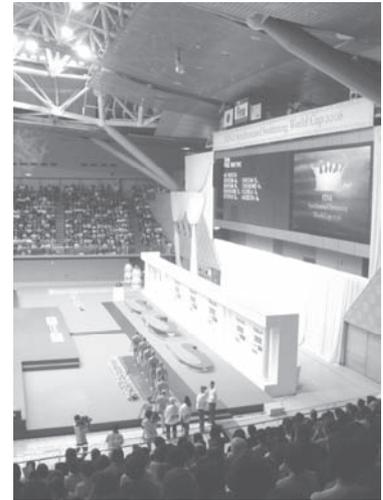
クロナイズドスイミングを違った目で観る事ができ、大変良い勉強となった。現在の世界の流れ、外から観た戦い、オリンピックまでの道のり、などこの経験は今後の活動に非常に大きな影響を与えたと思う。

ロシアの圧勝となった今大会は、展開の速さを中心とした演技が非常に多く見られた。現在のペア、ロシアのデュエット（アナスタシア・ダビドワ／エルマコワ）の選手達が世界を制した2002年から展開の速さは勝利に非常に大きな割合を占めていた。2002年の彼女達の演技の速さ、距離感、同調性の徹底性に世界は驚き、彼女達が流行となった展開の速さを誰もが演技に取り入れるようになった。そして今年は、決勝に出てくる国全てがそれをこなすようになっていた。

では、何故ロシアが世界一を制したのか。これは、彼女達が速さだけではなく、同調性とミスのない演技をやりきっているからだ。どの国も同じ様に速さは狙うものの、バラエティーの豊富さ（チームに関して）、同調性（全ての種目）、ミスがないと言う点で劣っているのだろう。しかし、今大会を違う目でみれば、多くの人が新たな何かを求めているのは間違いないだろう。「ロシアの徹底した演技」これだけでは満足しなくなって来ているのだ。世界を制したその時から、現在に至るまで演技のスタイルが一色だからだ。シンクロナイズドスイミングはロボットがやるものではない。人が演じるからこそ観客は新しいものが観たいと感じている。シンクロナイズドスイミングはスポーツでもあり、芸術でもある。これがポイントであろう。もちろん今大会での世界王者ロシアは徹底した演技を誰もが真似できないくらいやってのけている。しかし私達外から観るものとしては、それプラス新しいシンクロナイズドスイミングの流れがみたい。そう感じている。観客を飽きさせてはいけない。「こんな演技もあるんだ〜」そう思えるような、シンクロナイズドスイミングが観たいと感じた。

今回試合だけではなく、練習時間からプールサイドで見学をしていた。そこで感じたのは、なぜロシアがこの試合を制したのか少し違う面でもわかったような気がする。彼女達は今大会は敵なしの戦いだった。しかし、プールに誰もいなくなってもコーチの納得するまで練習をやっていたのはロシアだった。4日間の試合は非常に厳しいスケジュールになっており、1分でも選手を休ませる事が大切である。しかし、彼女達はそれを越えられるだけの体力がある。いかにタフでいられるか。これが大きなポイントだ。そういう点では、ロシアの選手のタフさに触れた一瞬だった。

今大会で最も他国に怖さを印象つけたのは中国であろう。アメリカに帰国した後、アメリカのコーチに感想を聞いたところ中国の成長にはやはり驚いていた。もちろん、発展途上だが期待感に溢れるチームメンバーだった。オリンピックまでの残り時間、彼女達がどの様に成長してくるか非常に楽しみだ。どの国も中国の怖さを感じたに違いない。今の世界地図（順位付け）はロシアを除けばどの国が上に上がっ





てきてもおかしくないくらい、接戦している。だからこそ、中国にもチャンスがあると言うわけだ。2008年の北京オリンピックが非常に怖い戦いになるに違いない。日本もけして余裕などない位置付けにいる。だからこそ、ロシアにあるものは当たり前前にこなし、彼女達にない、カラーを持つ事。これが今後のキーになるのではないかと思う。私は、滞在期間中改めてシンクロナイズドスイミングについて色々考える事ができた。

⑩ ナショナル選考会

サンタクララシンクロナイズドスイミングクラブの多くの選手は9月のワールドカップを終えた後、シーズンオフに入った。約1ヶ月のシーズンオフの後、練習を開始。12月（2006）にナショナル選考会があった為、練習内容は主に選考会の内容を中心に新しい演技の振り付けに入っていた。

12月に行われた選考会は3月（2007）に行われる世界選手権及び北京オリンピックそして、ナショナルBチームを選抜するものだった。今回は試合に同行することはできなかったが、練習風景を見ていて感じたことは、アメリカもタフな選手を起用しようとしていることだった。何故なら、今回の選考会の内容は体力的に非常に厳しく、規定要素をラップごとに組み込んでいる形で、内容が非常にハードなものになっていたからである。結局負荷をあげていると言うことは持久力が求められ、アメリカチームはタフで演じられる選手を求めているのだろうと見受けられた。その結果、3月の世界選手権のメンバーが決まりその中のトップ2人（デュエットで今回出てくる選手）は既に北京オリンピックのメンバー入りを決めていた選手となった。

現在ロシアを除き2位になる国は本当に予測が付かない。残念な事は今のロシアには敵がないこと（もちろん今後はわからない）。けっして毎回目新しい事をしてくるわけではないが、ロシアスタイルを徹底している限り、ロシアを超える他国の演技がまだ出てきていないのも現実かもしれない。そんな中、日本、スペイン、中国、アメリカの戦いは非常に面白い。今、どの国がロシアを脅かす存在になるか、そんな状態であろう。アメリカチームももちろん狙っている。2006年のロシアで開催された大会でのフリーコンビネーションでは1位をとっている。もちろんこれはオリンピックの種目ではないが、自信をつけたことは間違いないだろう。

3月に行われる世界選手権は北京オリンピックに向けて非常に重要な大会になる。現在アメリカナショナルに選ばれた選手達は12月（2006）の選考会後すぐにキャンプに入っている。数ヶ月後どんな戦いが見られるのか私自身楽しみである。

⑪ 第12回世界選手権（開催地 メルボルン）観戦（2007年3月19日～23日）

(<http://www.melbourne2007.com.au/>)

世界水泳選手権視察の為、19日よりメルボルンに入った。試合は17日より始まり、23日までの長丁場の戦いだった。それは何故かと言うと、今回から採用された（世界選手権のみ）テクニカルルーティンとフリールーティンそれぞれでメダリストを決める為、個々に予選、決勝があり、非常にタフさが必要とされる試合日

程になっていたからだ。しかし逆に、フランスのデデューの様に復活をかけ、彼女の得意とするフリールーティンだけに出場する事も可能になり、見ているものからすると、今までとは全く違う戦いに見えた。



今大会は昨年9月に行われたワールドカップから余り時間がなかった為か、同じプログラムで試合に臨んでいる国が多く思えた。その中、スペインチームが新しいフリールーティンで試合に臨んできた。これは非常にスペインらしい、手の込んだものだった。では、何故ロシアに勝てないのか。これは観客席から見ていると非常に良くわかる。スペインの演技は非常に面白い。演技の中にユーモアが沢山あり、目新しいものが記憶に残る。しかし、つめの甘さも見受けられる。同調性、足技の質などを見るとまだまだ荒さが沢山あった。ロシアはいつも通りロボットの様に合わせてくる。まるで誰かが操っているのではないかと思うくらい。目まぐるしさもたまに感じさせるくらい、スピードで押してくる演技。その中でも崩さない、そしてハイライトのリフトは必ず魅せる。どんなに新鮮味のない演技であっても、ここまで徹底されると、今のスペインではまだロシアを抜く事ができないのはわかる気がする。そして日本、彼女達はちょうど中立と言う感じであった。足の質と技の正確性では日本らしさがよく出ていた。一本上がった足はロシアにも劣っていないと思う。

個性の強いスペイン、徹底されたロシア、それに打ち勝つ為には、これぞ日本、と言われる何かが必要なかもしれない。スペインにはない緻密さが日本にはある。だからこそ、観客の心を一気に握れるパンチが欲しいと観客席から見ていて感じた。シンクロナイズドスイミングは非常に面白い競技だ、芸術でもあり、スポーツでもある。だからこそ、本当にいいものをみた時は鳥肌が立ち涙を流すのだと思う。

今回の戦いでのハイライトになったのはソロ決勝だった。この戦いは非常に興味深いものであり、表彰台に上がった選手3人の演技は本当に素晴らしかった。1位に帰り咲いたフランスのデデュー、この短期間であそこまで作り上げたのだと思うと、「凄い」の一言しか残らない。もちろん全盛期に比べるとスピード感はなくなっている。しかし、それをも超える演じる心が観客席まで伝わった。2位のイッシェンコは技・技・技の連続で、スピードのなくなったデデューに対比するように疲れを感じさせない、一気に演じきったという感じだった。3位のメングアルに関して、大人の哀愁ただよる、指先にも魂のこもった彼女らしい演技だった。

#### ⑫National Team 2合宿見学

National Team 2 (米国セカンド代表チーム)のトレーニングがサンタクララヘッドコーチChris Carveのもと行われることとなり、練習を見学する事が可能になった。



National Team 2はスイスオープンに向け選考会を経て集結されたメンバーである。6月からトレーニングが始まっているが約1ヶ月でという短い期間で試合に臨むのは非常に困難である。特にナショナルチームはあらゆるクラブから選手があつまるとして、通常慣れた選手同士ではないなく、チームを1ヶ月で仕上げるのは至難の業になるだろう。もちろどこまでのクオリティーを求めるかにより、時間のかけ方は変わってくるかもしれない。さらに、強化費用との兼ね合いもある。

練習の内容はサンタクララと同じ方向性なので目新しいものはないが、1ヶ月で新しい演技を作り上げ、どこまで完成度を高められるのか興味が沸くところだ。彼女たちはアメリカを7月16日に経ちスイスオープンに出場する。日本ナショナルBチームもスイスオープンに参加すると言う事なので、アメリカにとっても良い刺激になるに違いない。

練習の雰囲気は時に和やかな空気も流れ、意見が飛び交う場面もある。その点、進み具合が非常に遅く、見学している私があせりを感じるほどである。日本の場合、練習は内容が密で進むスピードが速いことから若い選手には時に強制的になってしまいうこともある。しかしそこがアメリカコーチの言う「日本人は訓練されている」という部分につながってくるのだろうか。私自身その中で育ってきたので、それが当たり前だったのだが、こちらに来てアメリカの自由さをみると、自分達の練習の無駄のなさを実感することができる。

私はいま、研修事業で経験する時間を与えてもらっている。日本から離れる事により、見えなかったのがみえてくる。それは、日本の良いところも弱いところも。そして視野を広げる絶好のチャンスなのであろう。そしてその自分が今後どの様に日本チームに貢献できるか。日本を離れたからこそ、学び得ることは沢山ある。技術だけでは、選手を育てられないと私は考えている。コーチの指導により進化し続ける選手と同様、コーチ自身も進化し続けなければならないのではないかと考える。現在De Anza Collageでコーチングを学んでいるが、教授が話すには、「どれだけ柔軟な考えを持ったコーチになれるか。ここアメリカにはたくさんの人種がいる。1チームに1つのカルチャーとは限らない。だからこそ、それぞれに対応できるだけの力、経験、知識があるかどうか。それが勝ち組のチームを作り上げるポイントになる。」

私はアメリカに来て、コーチとは何か、コーチは何ができるのか、何をすべきなのか考えさせられた。技術指導だけでは人の心は動かない。そして一流選手を作り上げる事はできないということなのだと思う。

## (2) 生活について

言葉も十分に伝わらない新しい場所で生活を始める事は想像以上に難しく、生活が安定するまでには非常に時間がかかる。色々わからない事があつたがいくつか例をあげてみる。

### ① ビザ

ビザ取得方法などは平成17年度派遣原田さんのレポートに詳しいことが書かれて

いる。それにプラスする形になるが私が経験したことをここで報告する。

アメリカには沢山のビザの種類が存在する。サンタクララアクアメイツがコーチング経験のほとんどない私を雇用する事は難しく、ワーキングビザを申告することはできなかった。ビザについて知識が全くなかった私はどのようにすればよいのかわからず、まず大使館へ電話をかけたが、有料な上、はっきりした答えが見つけれなかった。そこでインターネットで情報を収集し、弁護士を通じて相談する事を選んだ。

[http://www.bengoshiusa.com/law\\_firm/consultation/consultation.htm](http://www.bengoshiusa.com/law_firm/consultation/consultation.htm)

<http://www.usavisa.jp/>

<http://tokyo.usembassy.gov/j/tvisaj-main.html>

研修の後半にはコミュニケーションも取れるようになり、コーチングに集中する為にビザの変更を考え、サンタクララアクアメイツが保障先となりOビザの申請を行うことを決めた。しかしクラブチームによる金銭的な援助は難しく、今までクラブが他国からのコーチにOビザの申請をしたことがなかったため、自分で信頼できる弁護士をさがし、ビザ取得まで弁護士とのやり取りを自分で行った。

## ②運転免許取得

アメリカでは特に都心を離れると移動の手段は車中心となる。バスは時間が遅くなると安全面で不安があり、電車は日本のように沢山の路線があるわけではないので不便である。そこで車の購入は必然となるが、車を運転するには免許が必要である。カルフォルニアでは3ヶ月間の有給が国際免許で与えられるが、ここで一定期間の生活をする場合（ビザ保持者）、即座に免許の取得を要される。免許取得までのシステムは日本のように自動車学校に行く義務はなく、予約さえ取れば受けたい時に免許取得の受験ができる。私は日本での運転の経験があったため、即座にDMV (Department of Motor Vehicle) に行きテストを受けた。

まずはペーパーテストを行い、そこで合格すると一年間の仮免許が与えられ、その間にドライビングテストを合格しなければならない。ライセンス取得にかかる費用は一回25ドルでそれぞれ3回までテストを受ける事が可能である（不合格の場合）。例えば一度ペーパーテストが不合格になっても同じ日の同じ場所で二回目を受ける事が可能である。ペーパーテストは日本に比べ問題数は少なく、仮問題をしっかり勉強しておけば問題なく一回で受かるだろう。テストは年間三種類用意され、その内容がランダムに与えられる。問題は日本語にも対応しており申告すれば日本語訳で受ける事ができるが、英語を日本語に直訳している為、意味が混乱することがあるようだ。テストが比較的簡単な反面、ドライビングテストは難しいと言われており、特にアジア人に対し厳しいと言う噂もある。私はペーパーテストに受かったその日にドライビングテストの予約をしたが、通常は非常に混雑しており、早くても一週間から十日後になる。アメリカの場合、乗り合わせた教官が道を指示する形で、テストの前にコースを知る事ができない。その為、ドライビングテストの前に必ずそのDMVの周りを自分で走り、ある程度道を把握しておく事をお勧めする。



### ③車の購入

車を新車で購入するなら問題はないと思うが、私のように中古で購入するとなると方法は色々ある。まずはウェブサイトにてチェックしてみる。そして自分の条件に合えばそこに問い合わせして交渉を行う。アメリカでは個人で車を修理する事が当たり前なので、個人売買を行う際には、車の状態に気をつけなければならない。私は車に詳しい知人と共に中古車店を何件か回ったあと、気に入った車に乗車し、購入を決断した。その後、値段の交渉を行うが、二、三回の交渉後かなりの値段が下がったのには驚いた。

### ④住居探し

渡米当初は日本で探したホームステイ先に滞在していたが、生活もある程度安定した頃、アパート探しを行った。アパート探しは主に、ネット、人伝えなどがあるが、もし住む地域がはっきりしていれば自分の足で尋ねまわるのが一番いいだろう。ネットである程度アパートの良し悪しを調べ、そこから回ってみるのが一番確実である。

<http://sfbay.craigslist.org/>

<http://www.mynewplace.com/>

<http://www.rent.com/>

<http://www.apartmentratings.com/>

以下のサイトではルームメイトなどをよく募集しているので、ここから探すことも可能である。

<http://world.gokinjo.net/areatop.html?ACODE=usaa.0US.0ca.945>

<http://www.jinaonline.org/home.php?city=SF>

<http://www.bayspo.com/>

<http://sfbay.craigslist.org/>

また、これらのウェブサイトは生活用品を揃える為にも便利なサイトで、ここでは中古品が何十分の一の値段で揃えられる。これらのサイトにはその他の様々な情報も掲載されており、当初すべてがわからない、誰に聞けば良いかもわからない状態であった為、とても活躍した。

## （3）研修を終えて

今回の派遣は、自分がどれだけ周囲に支えられ今までの選手生活を過ごしてきたのか改めて実感し、自分を見つめ直す最高の時間となりました。更に他国のクラブに長期間滞在できたことは違う面から日本を知る機会になり、自分の視野を広げることができ、日本の中で最高と言える指導を受けてきた自分が違った指導方法を学びえたことは、今後の指導者としての道に必ずプラスになることだと思いました。

最後に、このような機会を与えて下さった日本オリンピック委員会、日本水泳連盟そして関係者の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げたいと思います。今後は日本シ



## 研修員報告〈テニス 谷澤 英彦〉



平成18年度・短期派遣（テニス）



### I. 研修題目

ジュニアからプロ選手までの指導方法

### II. 研修期間

平成18年11月30日～平成19年11月29日

### III. 研修地及び日程

#### (1) 主な研修先

- ・パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミー
- ・ゴールドコースト オーストラリア

#### (2) 受け入れ関係者

- ・ Pat Cash (元世界ナンバー1プレイヤー、1987年ウィンブルドンチャンピオン)
- ・ Chris Steel (アカデミーディレクター)
- ・ John Birrell (アカデミーヘッドコーチ)
- ・ Ben Mathias (ハイパフォーマンスプログラムコーチ)

#### (3) 研修日程

##### ①通常研修

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーにてパットキャッシュ氏から元世界ナンバー1の経験を活かした指導方法を学ぶと共に、オーストラリアでの指導方法を研修する。

##### ②特別研修

- ・ ゴールドコーストで開催のジュニアトーナメント視察
- ・ 全豪オープン視察
- ・ ゴールドコースト女子国際視察
- ・ テニスクィーンズランドエリートキャンプ視察

### IV. 研修概要

#### (1) 研修項目の細目

- ①研修動機について
- ②パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーについて
- ③練習環境について
- ④練習方法について
- ⑤コートサーフェスについて

- ⑥パットキャッシュ氏から学んだこと
- ⑦フットワークについて
- ⑧コーチングの違いについて
- ⑨テニスクィーンズランドエリートキャンプを視察して
- ⑩地元のジュニア大会を視察して
- ⑪ゴールドコースト女子国際を視察して
- ⑫全豪オープンを視察して
- ⑬その他、現地での生活について
- ⑭これからの課題

## (2) 研修方法

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーにてオンコートでの研修。近郊の大会視察

## (3) 研修報告

### ①研修動機について

まず元世界ナンバー1プレイヤーのパットキャッシュ氏の指導を間近で見られるということが大きな要因だった。キャッシュ氏は現在もシニアツアーに積極的に参加するなど多忙なため限られた時間であったが、世界チャンピオンの指導を間近で見る事が出来た。また、オーストラリアはこれまでにロッド・レーバーを始めとするグラウンドスラムチャンピオンを数多く輩出してきた伝統国で、私が渡豪する以前にナショナルチームの監督をしていた14歳以下の選手との対戦でもオーストラリアはアジア・オセアニア地域において最大のライバルであり、スピードやパワーに頼らず、テクニクの完成度で勝負をするプレースタイルは、体格で劣る日本人プレイヤーにとって非常に参考になると感じた。また、現在テニス界では世界レベルに達するための目安としては14歳までに全てのテクニクの習得が必要と言われている中で、どのような指導をすれば低年齢期においてテクニクの習得が可能なのか興味が沸いた。

### ②パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミーについて

パットキャッシュインターナショナルテニスアカデミー（以下PCITA）は、クラブ運営のほとんどを選手育成主体にしており、一般愛好家（日本でいうところのスクール）はごく一部となっている。日本でのクラブ運営は一般的に選手育成は利益が少ないためスクールで稼ぎ、その利益で選手を育成するケースが多い中で、選手育成だけに集中できることは指導者にとっても非常に良い環境と言える。その反面、生徒にかかる負担が大きくなり、選手コースの月謝は約20万円ほどで、練習環境の違いがあるので一概には比べられないが、金額だけを比べると日本の4倍近い。その分、選手の保護者やオーナーからの判断の目は厳しく、3月中旬に選手の成長が思わしくないという理由から、ディレクターであったJohn Birrellがヘッドコーチに降格になり、新たに元NSW州の州代表コーチのChris Steelが就任した。

私自身はJohn Birrellの情熱的な指導に好感を持っており、コミュニケーションも良く取



れていたことから、この降格は心情的に非常にショックだった。しかし、研修という観点から見ると色々なタイプの指導者から指導方法を学ぶことが出来た。実際、Chris Steelは物事を冷静に見るタイプで、指導方法も科学的、理論的であり、あらゆる面でJohn Birrellとは逆のタイプで結果的には2人の違うタイプの指導者からより多くの事を学べた。

### ③練習環境について

13面のハードコートにトレーニングジム、海外から練習に来る選手が宿泊できる寮やホームステイなど、豪華ではないが必要なものは全て揃っている。インドアコートは無いが、1年のうちに300日は晴れると言われているゴールドコーストではインドアコートの必要もなく、私の滞在中に1日中雨が降り、練習がキャンセルになったことはほとんどなかった。

1日の練習時間は2パターンに分かれており、学校に通っている選手は登校前の8:00～10:00と下校してからの16:00～18:00のエリートプログラムと、通信制の学校に通う選手、プロの選手などは10:00～12:00と13:30～15:00のハイパフォーマンスプログラムに分かれている。

ハイパフォーマンスプログラムには男子ジュニア選手に有望な選手が多く、16歳以下のオーストラリアチャンピオン、マーベリック・バーンズを始め、16歳以下のオーストラリア代表チームとして世界一を経験したアレックス・サンダース、ITF世界ジュニアランキング10位のステファン・ドナルド、同60位のジャレッド・イーストンなどが在籍している。

パットキャッシュ氏がいない時期については主にこのハイパフォーマンスプロ



グラムを担当するBen Mathiasコーチと共にどのような指導をしているかを研修した。Ben Mathiasは年齢はまだ27歳と若いですが、ナショナルコーチとしてグラウンドスラムなど引率をしているコーチで、現代テニスの状況を把握しており、非常に指導力があるコーチである。仕事の内容的には日本での私のポジションと同じような立場にあるので、共感しやすく色々な情報交換が出来た。

#### ④練習方法について

##### ウォーミングアップ

日本でも最近ではウォームアップに動的ストレッチを取り入れているところも多いが、PCITAではダイナミクスと呼ばれる動的ストレッチを取り入れており、どれも今まで見たことがないような動作が多く、一つ一つのストレッチに「スパイダーマン」、「スーパーマン」など形を現した名前がついており、一度覚えればその名前を言うだけで選手がスムーズに動くのが印象的であった。

##### ラリードリル

日本ではカゴ一杯にボールを用意しての球出し練習が多いが、PCITAでは球出しはほとんど行わない。基本練習が少なく、フィーリングを高めるためのラリーはなく常に何かの課題がある。選手同士、生きたボールを打ちラリーをすることが主な練習。

##### オープンスキルを鍛える

日本ではより綺麗なフォームを目指し、打ち方（クローズドスキル）に時間をかける傾向にあるが、PCITAでは徹底的にオープンスキルを鍛え、How to hitではなく、How to winの習得を目的とした練習が主であり、ミスをした時には打ち方のアドバイスではなく、狙ったコース、球種、スピードなどが正しかったかをアドバイスする。1面に2～4人と少人数なためシングルスの実戦練習が多く出来る。フォームをチェックをする場合はプライベートレッスンを取るのが一般的となっている。

##### ポイント練習

試合を意識したポイント練習の中では体を動かすだけでなく、プレーの中に色々な条件を付け、より考えながらプレーすることを求められる。プレーのスタイルに条件をつけるものや、得点方法を変えるなどして精神的な強さ、勝負強さを求められるポイント練習がある。例を挙げると

- ・サーバーは1stサービスが入ったら次のボールは必ずフォアハンドで取らなければならないという条件でのポイント練習（サーバーが積極的にゲームを進めるためのドリル）
- ・サーバーは1stサービスが入ったらサービス&ボレーをし、ワイドにサーブをした時は1stボレーをオープンコートへ、センターにサーブをしたら相手の逆をつくコースに1stボレーをするという条件でのポイント練習（サーバーがプレーの



幅を広げるためのドリル)

- ・自分がゲームポイントもしくはブレイクポイントを握った時に次のポイントを落とすとポイントを没収され0（ゼロ）に戻る（勝負強さを求められるドリル）など。

#### 重いボール（ヘビーボール）

ベースラインでのストロークにおいてはスピンの多くかかったボールを打つということに意識を持たせる。ストロークの威力の判断はスピードではなく、より重いボールであるかというのが判断材料となる。日本でもここ数年でエッグボールという呼び名で浸透され始めているが、あくまでバリエーションの中の一つであり、日本の指導ではフラット系のボールを打たせることが多いので、海外での日本人選手の印象はボールがフラットで軽い（特に女子選手）というイメージが多い。

#### ショートラリー

サービスボックスの中だけでの短い距離をラリーする時間が長く、その中でスピンやスライスのかけ方、ボレーの細かいタッチなどをかなり時間をかけて練習をする。球出しなどの基本練習がない代わりにこのような方法でテクニックを学ぶ。

- ・回転のコントロール：スピンVSスピン、スピンVSスライス、スライスVSスライス
- ・ステップの確認：フロントフットホップ、バックフットピボット、モーグル
- ・動きの確認：2フォア&1バック、2ボレー&1ストローク

#### ⑤コートサーフェスについて

現在のテニス界では主にハードコートもしくはレッドクレイが主流であるが、共通しているのはどちらもよく弾みバウンドが高いということである。オーストラリアのコートもハードコートが主流で非常にバウンドが高い印象を受けた。それに慣れている選手はそのコートの特性を活かし、更に弾ませるために先に述べたようにヘビーボールを多用する傾向にある。海外の試合に行き、まず驚くのはその点であり、普段球足の速いハードコートやバウンドの低い砂入り人工芝のコートでプレーしている日本人にとってはいつも以上に高い打点で打たなければならないケースが多く、これをアジャストし、慣れていくまでに日本人選手は苦勞する。特に砂入り人工芝のコートについては世界的にほとんど見ることはなく、日本とオーストラリアくらいだと言える。しかし、オーストラリアでも砂入り人工芝のコートはあくまで一般愛好者向けのコートという認識であり、競技者はハードコートを使用し、大会でも極力使用することを避けるなどしてなるべく世界基準のコートでプレーさせる努力をしていた。

#### ⑥パットキャッシュ氏から学んだこと

短い時間ではあったが、同じコートに立ち、彼の指導を間近で見ることが出来た。ネットプレーヤーのキャッシュ氏らしく、PCITAのどのコーチよりもネットプレーにかける時間が多かった。現在はグランドストローク主体のプレースタイルが多く、数多くの世界的ネットプレーヤーを生み出したオーストラリアでもその流れは強くなっているが、最終的にポイントを取りに行くために必要になってくるのはとどめとなる

ネットプレーだという言葉通り、相手をコートの外へ追い出すのに最も効果的なアングルボレーの練習が多かった。ドリル自体は特に目新しいものはないが、一つ一つの質が高いと練習もシンプルになっていくのではないかと思う。しかし、サービスに関しては彼独特の指導法があり面白かった。



普通は肘を柔らかくムチのようにしなやかに使うというアドバイスが多い

が彼の場合は肘を伸ばし打点を後ろにして打つ。極端に言えばオーストラリアで有名なスポーツ、クリケットのような投げ方をイメージして打つように指導していた。その方がよりスピンのかかり、より多くのスピンをかけられることが良いサービスであり、安定をするという理論であった。また、私のイメージでは1stサービスがサービスの中心であり2ndサービスはその補助的ショットであるが、キャッシュの場合には最も安定し、よりスピンの効いた2ndサービスがサービスとしての中心であり、1stサービスは2ndサービスをより強く打つイメージだと言われたのが大きな違いであった。

一番印象に残ったことはとにかく選手と打ち合うことである。彼自身がまだシニアツアー等でプレーをしているということもあるが、時には試合をすることもある。こちらでは選手同士の練習が基本でプライベートレッスンでもない限りはコーチと打ち合うことはない中でキャッシュ氏の指導は非常に熱意を感じた。伝説的な偉大な選手と打ち合うことで選手はトップ選手のボールの質を肌で感じる事が出来、選手には大きな影響力を与えらると思う。

#### ⑦フットワークについて

トップ選手、特にフットワークが良いとして知られる、オーストラリアでは一番新しい世界チャンピオン、レイトン・ヒューイットのフットワークを解析し、それぞれに名前をつけマニュアル化したフットワークの指導を取り入れており、フォームの指導はあまり行わない中でフットワークに対する指導は細かく非常に多かったので練習内容とは別に報告をする。

非常に細かい内容で、どこにボールが来た時にどのステップでどのようなショットを打つかまで決まりがあるが、それを全て行うのはラリーが続いている中では逆に頭が混乱してしまうので、これを全て取り入れるというよりも、選手が間違った動きをしている場合にアドバイスをを行うことが最も効果的で、ステップの形を覚えれば選手とコーチの共通の意識が持ちやすく、指導する際には大きなメリットとなる。ここでは15に分けられた動きの中から練習の中で取り入れる頻度が多かったものを紹介する。

**Step Down Pivot** (踏み込んで打ち、体重を前に乗せるような動き)

踏み込んでコンタクト→体重を前に乗せ後ろ足の膝を落とす→後ろ足を45°前へ



出す（フォアなら2時の方向、バックなら10時の方向）

**2 Foot Pivot**（速く深いボールに対する処理の動き）

オープンスタンス→コンタクトしながら2本足で正面を向くように回転→体が浮かないように後ろ足の膝を落とす

**Reverse Spin**（高く弾む深いボールに対する動き）

セミオープンスタンス→空中で回転し、反軸足へ体重を移しながらコンタクト→反軸足で着地する

**Forward Transfer**（打ち込むボールに対しボールにより威力を出すための動き）

セミオープンスタンス→空中で回転し、反軸足へ体重を前に移しながらコンタクト→反軸足で着地、軸足は前へ出す

**Mogul Step**（振られた状態からのカウンターショットの動き）

オープンスタンス→サイドステップをするように足を入れ替えながらコンタクト→体が浮かぬよう低い姿勢のまま外側の足を大きく開いて着地

**Front Foot Hop**（短く低いボールに対する攻撃のための動き）

踏み込んでコンタクトしながらホップ→後ろ足は上げる→後ろ足を前に出して着地

**Back Foot Pivot**（深いボールに対する守備のための動き）

後ろに下がる→セミオープンスタンス→軸足に体重に乗せながらコンタクトし、反軸足を上げる→反軸足を前に着地

#### ⑧コーチングの違いについて

練習スタイルの他に、コーチングにも大きな違いがあった。コーチは選手とのコミュニケーションを大切にし、コート上でのディスカッションが非常に多かった。各ドリルの前にはコーチが練習のポイントはどこか質問し、選手が答え、意見を交換しながら練習の意図を理解する。選手によってはコーチが導きだそうとする答えと全くピントがずれた答えをする選手もいるが、失敗を恐れずに発言をする。自主性、表現力を引き出すためには非常に有効な指導方法だと感じた。

日本では答えを引き出そうとしても失敗することを恐れて発言を躊躇する子の方が多いという気がする。また、コーチは選手を一人の人間として尊重しており、高圧的な指導はなく、声を荒げることもない。問題があれば話し合い解決するのが非常に印象的であった。

#### ⑨テニスクイーンズランドエリートキャンプを視察して

クイーンズランドテニス協会主催の強化合宿の視察。主にブリスベンやゴールドコーストのトップジュニア集まった。特に12歳～14歳の男子のレベルが高く、体の大きな選手は意外と少ないがテクニックがあった。バックのスライスやボレーなど

完成度はまだまだだが、基本の形は出来ているので継続して練習を積みれば将来的には優れた選手に成長するだろうという印象を受けた。

やはりここでも球出しはせずラリー練習とポイント練習を中心としたオープンスキルを鍛える練習がほとんどだった。午前と午後の練習の間にはボードを使って戦術面やメンタル面の講義もあった。内容的には基礎的な部分が多かったが、知識の少ない低年齢の選手には必要なことなので、こういったオフコートでの時間の使い方も参考になった。



#### ⑩地元のジュニア大会を視察して

ゴールドコースト、ブリスベン近郊ではほぼ毎週末は試合があり、若い選手が経験を積む場になっている。ジュニアの年齢別以外にもオープン部門もあり、これらを1つの大会に重複して申し込むことも出来るので、1大会の中でも多くの試合を経験できる。日本のジュニア選手はほとんどが全国大会の地域予選や都道府県予選が多く、今、勝たないと次のステップに進むことが出来ない大会が多いので、どうしてもリスクを冒さずミスの少ない無難な試合をしてしまう傾向にある。こちらでは一つ一つの大会が独立しており、負けてもまた翌週には新しい試合が始まるので練習してきたことを試しやすい状況にある。

その中で印象的だったのは14歳の女子選手で、試合には負けても最近では男子でも多用しないサービス&ボレーをほとんどの場面でトライする選手がいた。日本でそのようなトライをする選手はまずいない。また、毎週そのような試合に参加しているので試合経験が圧倒的に多いことも日本とは大きな違いを感じた。1日に3試合をこなしたり、朝7時半から試合がスタートすることも当たり前で、オーストラリア人の精神的タフさはこのようなところからきているのではないかと感じさせられた。

6月には教え子で中学生チャンピオンの齊藤秀がPCITAを訪れ、ゴールドコーストジュニア選手権という地元では大きい方に入る大会でレベルも高い試合にも参





加した。最初は私と同様にこちらでの練習方法の違いや環境の変化に戸惑いを感じていたが、中学生チャンピオンの意地を見せ、見事に優勝した。しかし、ストロークでのボールの多さ、高く弾むコート、強力なサービスに戸惑いを感じていた。



日本のジュニアはトップ選手でもこうした外国人との対戦経験が少なく環境や相手のボールに慣れるまでに時間がかかってしまう傾向にある。日本で選手を強化、育成するにはいかにして外国人との対戦を増やすことが出来るかが今後の課題となるであろう。

⑪ゴールドコースト女子国際を視察して

クィーンズランドで唯一行われる女子の公式戦の視察。会場となったロイヤルパインリゾートはゴルフの女子公式戦も行われている。テニスコート自体は面数も少なく、日本の感覚では観客動員などのキャパシティを考えると公式戦をするほどの大きな会場ではないように見えるが、ドロー数を少なくすることで試合数を調整し、昼の部と夜の部で観客の入れ替えをするなど



して観客動員のための工夫をしている。こういった努力をすれば大きなスタジアムを確保しなくても日本で十分に公式戦を開催することが出来るのではないかと感じた。

試合はシングルス、ダブルスの準決勝を視察した。今大会の目玉選手、ヒンギス選手のプレーを楽しみにしていたが、相手選手の怪我のため、数ゲーム終わった所で途中棄権となってしまった。しかし、がっかりする観客に応えるようにヒンギス選手は試合後もコートに残り、ボールパーソンの子や観客をコートに招き、ラリーやゲームをし、観客を楽しませてくれた。スター選手だけあり、この辺りのファンサービスも一流であった。

⑫全豪オープンを視察して

かつては他のグランドスラムと比べ人気がないと言われてきた全豪オープンであったが、運営を含め、色々な改革を試み興行面でも急成長をしている。オーストラリア人選手にトップ選手が少なくなってしまうことや、アジア選手の活躍もあり、近年では「アジアオセアニア地域のグランドスラム」というキャッチフレーズを付け、アジア人選手にWCを与えたり、センターコートなどのショーコートでプレーさせるなど、かなりアジアのテニスマーケットを意識した大会となっている。

日本人男子として2年振りに本戦に出場した添田豪は勤務先である荏原SSCのアカデミー生として直接の担当ではなかったものの、小学校の頃から彼の成長振りを見てきた一人としては非常に嬉しかった。

初戦は世界ランキング9位のマリオ・アンチッチ(クロアチア)との対戦。ショーコートでのオープニングマッチということもあり、多くの観客が入る。オーストラリアはクロアチア系の移民が多く、サッカーのクロアチア代表ユニフォームを着た50人程の応援団が試合前から盛り上がっていた。試合は序盤互角の戦いをし、先にブレイクをするチャンスがあったが、そこからアンチッチの武器であるサービスが連続して決まり、流れを失ってしまった。その後も堅実なプレーをするアンチッチが常に主導権を握り、残念ながら添田はストレートで敗れてしまった。アンチッチは派手さはないが一球のボールに重さを感じた。バウンドも高いためにボールのキレとタイミングで勝負をする添田はいつもよりも若干打点が遅れ(押され)てしまいアンフォーストエラーが増えてしまった。また、大事な場面で勝負出来る武器もなかったように感じる。ベビーボールへの意識への問題、コートサーフェスの問題、プレースタイルの問題など皮肉にも今回の研修で感じた問題点が敗因となってしまった。

また2週目からはジュニア部門に参加したナショナルチームのサポートをした。その中には現在の教え子である守屋宏紀が参加しており、2ヶ月振りの再会となった。試合は2回戦でシード選手を破りベスト16に入り、ベスト8入りをかけた試合には川延栄一氏や杉山愛選手にも応援に来ていただき、試合後にはテレビ局のインタビューを受けたりするなど華やかな舞台の中で戦えたことは今後の選手生活に大きな財産になるだろう。





大会終盤は自宅にてテレビ観戦となったが、こちらでは年が明けてから全豪オープン終了までの約1ヶ月間ほぼ毎日テニス中継があり、その放送時間の多さに驚いた。全豪ではメイン種目のシングルスはもちろんのこと、ダブルスやミックスダブルスまで放送があった。また前哨戦では決勝の後の表彰式や選手、役員、スポンサーのスピーチまであり、見る気がなくてもテレビのスイッチを入れればテニスが流れてくるのでテニスをしていない人でもテニスを語る事が出来るほどである。実際、私もこの時期はパットキャッシュと書かれたアカデミーのTシャツを着ていると話かけられることが多く、人々の関心も高い。そんな環境で育つ子供たちは自然と日頃からテニスに触れ、テニスを覚えていくのではないかと感じさせられた。テニスは教えるよりも目から入った情報をダイレクトに伝える方が吸収は早いので、教えなくてもある程度打ててしまうというのはこの辺りに大きな要因があると思われる。

⑬その他、現地での生活について

オーストラリアは今、経済が好調でバブル期であるということもあり、物価の高さに驚いた。不動産はもちろんのこと、生活用品も日本以上に高く、ペットボトルのドリンクが定価300円もした。それに加え、出発時1ドル85円だった円が、一年後には105円になるなど円安の影響もあり生活に関しては非常に厳しいものがあつた。



今回は家族も同行し、長男は幼稚園

に通っていたが、永住者に関しては国から80%の補助が出るものの、私達のような一時滞在者では月8万円とこちらも日本の感覚から考えると割高であった。

しかし、物価が高いことを除けば気候や生活環境は素晴らしく、多くの日本人観光客や移住者がいることもうなずける。現地では日本人を対象としたありとあらゆる職種があり生活面で苦労することは少なかった。特に病院に関しては会話に不安がある私達としては非常にありがたかった。

また、オーストラリアの人々は労働時間が短く、週末の休みをエンジョイするために仕事をするという考えがあり、週末にはパーティーをして友人と楽しく過ごすなど生活にゆとりを感じた。観光地という土地柄、大きなイベントが多く、ゴールドコーストマラソン、インディーカーレースなど、日本ではあまり目にする機会がない他のスポーツも間近で見ることが出来、大きな刺激を受けた。

⑭これからの課題

移民の国、オーストラリアと比べると外国人との対戦が少ない日本では、世界のテニスを知る機会が少なく、世界に通用する選手を育てるという目標はあるものの、日頃の対戦相手は日本人なので、どうしても日本人に勝つための日本人のテニスになってしまう現状にある。以前に比べればジュニアの頃から海外遠征を多くこなし、

経験を積ませる流れはあるが、これは経済的にも恵まれたごく一部の選手、もしくは協会のサポートを受けたナショナルチームに限られている。こういった状況は簡単に変えられることではないので、今後は世界に通用する日本流の確立が必要になるのではと思う。

例えば野球は主に国内で選手を強化、育成しているのもそれほど多くの海外経験を積んでいる訳でないが、今では多くのメジャーリーガーを生み出している。特にイチロー選手や桑田選手の野球に対する取り組み方はメジャーリーグでも注目をされており、日本人選手の技術の高さ、正確性が評価されている。テニスにおいても国内での強化、育成がそのまま世界で通用するような図式を作ることが成功への近道ではないかと思う。

#### (4) 研修を終えて

今回の研修を終えるにあたり、まずこのような機会を与えてくださった日本オリンピック委員会、日本テニス協会、勤務先である荏原湘南スポーツセンターの関係者の皆様にお礼申し上げます。

選手時代から現在まで30カ国以上の国を訪れてはいましたが、試合となればどうしてもホテルと試合会場の往復になってしまい、その国の文化や歴史、生活習慣、国民性などといったところまでは触れることは出来ませんでした。今回のようにじっくり腰を据え生活する中で、これまでに感じる事が出来なかった色々な経験をする事が出来、視野が広がったように感じます。海外から日本を見ることで、日本のテニス界を第三者の視点から見る事が出来たのは今後の指導にも大きな変化が出ると思います。

今回の研修では多くのことを学ぶことが出来ましたが、それと同時に現在の日本とオーストラリアにおけるコーチングのレベルにそれほど大きな差はないということも実感出来ました。

日本の指導者の多くは非常に勉強熱心で、アドバイスも細かいと思います。オーストラリアはこれまでの歴史と伝統のから来る自信とポリシーを持っているというのが大きな違いです。多くのグランドスラムチャンピオンを生み出したオーストラリアではいくつもの成功例がありますが、日本は近年において、女子は伊達公子選手を始め成功例は沢山あるものの、男子は松岡修造氏一人で、具体的成功例に乏しいので、指導者も未だ模索の時期となっているのが現状です。

しかし、次なるスターを生み出すことが出来ればテニス界は活性化され、勢いが出てくるのではないかと思います。最初の壁を破ることは困難なことではありますがテニスに夢を持つ人々が知恵を出し合い協力し、自分たちで歴史を作るという気持ちで取り組めばその壁は破れるものと信じています。私もその中の一人として今後も日本テニス界の発展のために微力ながら貢献していければと思います。

## 研修員報告 〈フェンシング 岡崎 直人〉



平成18年度・短期派遣（フェンシング）



### I. 研修題目

トレーニング方法全般の習得およびマネジメント

### II. 研修期間

2006年11月20日～2007年11月19日

### III. 研修地及び日程

#### (1) 主な研修先

C.N.F.E. / C.R.E.P.S. (Centre National de Formation à l'escrime)

#### (2) 受け入れ関係者

- ・フランスフェンシング協会
- ・ALBIN SIRVEN (フランスフェンシング協会役員)

#### (3) 研修日程

通常研修 週5日 研修所による指導者養成授業  
授業要領

曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1時限 8:00～10:30	Epée	Fleuret	Epée	Epée	Fleuret
2時限 10:30～12:00	Sabre	Pédagogie collective	Fleuret	Sabre	Pédagogie collective
3時限 14:00～15:30	-Epée -Fleuret -Sabre	Pédagogie Collective Expérimentale	Technique de L'écrit et oral	Assaut Et Arbitrage	Sabre

### IV. 講習内容について

#### (1) 通常研修

##### ① 研修前の準備（ビザ取得について）

フランスでの研修に当たっては、1年間滞在するための滞在許可証を取得しなければならず、研究者ビザ取得の準備を行っていたが、在日フランス大使館にて研究者ビザが発行される直前、受け入れ先機関が研究者ビザを発行するに値しないという理由から、査証の発券を取り消され、急遽ビジターという査証に変更という形になった。

また、現地ではその査証から、滞在許可証を発行してもらいはじめて、1年間フランスに滞在することができるが、そのためにも現地にて、以下のものが必要になった。

- ・受け入れ先機関の証明書
- ・住居の証明書
- ・公共料金の支払い明細書
- ・預金通帳のコピー
- ・滞在中の給与等支払い機関の証明書（仏語）
- ・胸部X線写真、戸籍謄本（仏語）

基本的にアルバイト等の金銭を受け取る仕事をする事ができないビジターは、滞在期間中に金銭に困ることがないという証明書さえあれば、発券までそれほど苦勞することはないが、受付場所と発行される場所が違う所だったり、受付される相手によっては、何度もやり直しを強いられたりすることがあり、苦勞を強いられる場合がある。

私の場合、受け入れ先機関へその場で電話をつなげられそこへ通っているかどうかの確認まで行っていた。

また、戸籍謄本や給料発給書などは英語表記のものを持ちこんだが、すべてフランス語表記のものでないと受け付けてもらえず、急遽、現地の専門の場所にて、翻訳証明付きの翻訳をお願いした。

## ②受け入れ先機関（C.N.F.E.）での研修について

私の受け入れ先として迎え入れていただいた機関はC.N.F.E.というフランス国内において、フェンシングの指導者を育成させる専門学校に近いもので、年によってその受け入れ方が異なるが、本年（2007～2008年）は9ヶ月間平日休みなく受講する形式だった。

その中で、火曜日2時限に、実際に小学生低学年の子供を指導し（約1時間）その後、指導内容について話し合いを行う。

フランス国内では、小学校の授業として、フェンシングを取り上げている学校も多く、その時間は学校の先生とフェンシングのコーチ資格者が話し合って授業内容を決め、スケジュールを組む。また、同じく火曜日の3時限はパソコンを使ってフェンシングに関するもの（例：試合用プログラム、カレンダーなど）を作成し、水曜日の3時限は座学によるフェンシングの研究を行う。コーチ資格者は試合の運営等についても知識を有していなければならないことから、受講者は熱心に取り組んでいた。

その他の時間は、それぞれの種目時間が振り分けられており、各種目の担当講師が指導にあたる。基本的には、その時間の課題（例：アタックサンプル、プレパレーション、コントラアタック、コントラリポストなど）に



写真1 子供たちにサーブルを教える様子



そして、どのように指導すれば良いのかを習う。約1時間、個人レッスン方式、または団体練習でお互いを指導し合い、その後、問題点を話し合う。いくつか課題を終了するとその中から、任意に選んだ課題を出されて、テスト形式でデモンストレーションを行う場合もある（実際に点数をつけられる）。また、団体レッスンの形式をとる場合もあり、この際には一人が代表となり、皆を指導するテスト形式で行われる。



写真2 指導の様子

6週間の内1週間は、同じ研修を修了し、次の段階へ進んでいる指導者が受講者を指導し、指導内容について話し合う形式での講習を行う。



写真3 施設内の寮

これらの講習では、活発な意見交換が行われ、問題点があれば、指導したものはどのような意図で行ったかを答えなければならない。あるときには、担当講師から答えを迫られ、涙ながらも回答をしていた受講者もいた。

通常講習は15時半に終了し、その後1～2時間は意見の交換、フリーでの練習、図書館へ行くなど各自自由に行動をし、夜はそれぞれの所属するフェンシングクラブで練習・指導を22時頃まで行う。

また、C.R.E.P.Sは寮を備えており、研修受講者は希望により寮に宿泊する事ができる。寮は一人または二人部屋で二部屋に一つのシャワーとトイレがあり、3食付。研修受講者は有料だが、同じ場所で練習をしている、選抜されたフランス選手（女子サーブル、フルーレナショナルチームレベル、男子フルーレジュニアナショナルチームレベル各4名）たちは全額国からの補助にて、宿泊している。

### ③指導者試験（BE1）

検定試験はフランスフェンシング協会の各支部より試験管が立会い、筆記論文、口頭面接、ペタコジック・コレクティブ（3種目+小学生）個人レッスン（3種目）を行い、実技力、理解力、指導力がテストされ、合否が確定する（合格しなかった項目は、翌年再び受講する）。検定結果は、試験終了約1週間後に本人の家に郵送されるが、受験者の多くは既に各フェンシングクラブと契約をしており、検定結果の出る前からクラブで指導を始めるが、合否の結果によってはクラブを変える指導者もいる。

### ④ナショナルチーム等有望選手の練習について

私が通っていたC.R.E.P.S.では、女子サーブル・フルーレ、ジュニア・カデ男子

フルーレのナショナルチームが練習を行っていたが、その中ではジュニア・カデ男子フルーレの練習に参加することができた。

ナショナルチームは年間の試合結果と9月初旬に開催される国内大会の結果を基準に選考され、希望者のうち上位4名までがC.R.E.P.S.内にある寮にて全額補助にて、練習に打ち込むことができる。

練習は2名のコーチが上位4名の選手を中心に、ジュニア選手8名、カデ選手8名の16名のスケジュールを組み、週2回3時間の合同練習とコーチとの1対1のレッスンが中心となる。また、選手はそれぞれクラブチームにも所属しており、夜にはクラブチームでも練習を行っている。



写真4 ペタゴシク・コレクティブ (小学生の部) 試験中の様子

#### ⑤クラブチームについて

フランス国内では、フェンシングがとても盛んなことから、パリ市内にも多くのフェンシングクラブがある。大きなクラブでは、フルーレ、エペ、サーブルの3種目を指導しているが、そういったクラブはまれで、多くのクラブは1種目、または2種目を指導している。15時～18時までは小学生くらいの年齢を対象とした練習時間で、その後、一般の練習時間となる。

小学生の練習では、子どもたち皆が楽しめるように練習方法を工夫している指導者が多く、運動能力を高めながらフェンシングの技術を学んでいくよう指導をしている。また、一般を対象とした練習では、指導者により様々な指導方法をとっているが基本的に、選手は好きな時間にクラブに来て選手同士で試合形式の練習を行い、指導者は選手に合わせて個人レッスンを行っている。

その中でも、まだ創立2年目のPUCというクラブは、フランスナショナルチームのコーチが3名所属しており、練習場所もパリ市内に2カ所持っている大きなクラブである。私はそのクラブで、見学と練習をすることができた。

フランス国内のクラブチームではそれぞれにクラブの指導方針があり、PUCでは、若い選手を中心に運営をおこない、勝つための技術を中心に指導を行っている。趣味としてのフェンシングクラブも多い中、少し厳しくてもこのクラブに所属したいと言う選手も多くいた。



写真5 クラブチームでの練習



## （2）特別研修

### ①アーティスティックフェンシング

アーティスティックフェンシングとして、昔から受け継がれている手法や映画の撮影などで使用されるフェンシングの動作を実際の振り付け師の方を呼んで、講習を受けた。2本の剣を使用しての立ち回りなど、普通と全く違った動きに戸惑いながらも、大きく見栄えの良い動きや、スムーズな剣さばきなど、映画の格闘シーンのように、作られているのを学んだ。



写真6 二刀流による剣さばき

フランス国内においてはアーティスティックフェンシングは、歴史も深く人気もあり、クラブによっては週に2～3回アコースティックフェンシングを練習する所もあり、フェンシングをスポーツとしてとらえるだけでなく、古来からの格闘技そして芸術として根付いているヨーロッパ独自の文化となっている。

日本でもフェンシングをメジャーにするためにはこのような振興活動も必要であると実感した。

### ②ハンデキャップスポーツ

日本国内ではあまり、触れる事ができないが、フランスでは、ハンデキャップスポーツのフェンシング指導者もこの研修生の中から、選ばれることから2週間の集中講義にて、ハンデキャップスポーツでの指導の仕方を学んだ。



写真7 試合用の道具を使用して、個人レッスンの仕方を練習

足が使えず、間合いを体感で作り出すため、普通のフェンシングとは違った技が多く、それにそった指導方法がある事を実感する事ができた。

### ③エコール・ド・ポーリテクニクへの指導研修

研修生は試験を受けた後、すぐに各クラブチームで指導を開始することから、実際に現役選手に対しての指導方法を学ぶため、防衛大学校（l'Ecole polytechnique）にて、実際のフェンシングを習っている選手に指導をおこなった。

選手は初級から中級レベルのため今までやってきた基本を中心にエペ、サーブル種目を各受講者にそれぞれ一人ずつを指導し、終了時に技術的にそれほど高くない選手に対してどう指導するかを議題に全員にてディスカッションを行った。

④マラソンミニム パリ国際大会

2月に、パリ市内においてミニム選手の大会が行われ、日本からも多数の選手が参加した。

この大会は普通の試合方式と違い、若い選手にできるだけ多くの試合を経験させ、国際的なフェンシングレベルを感じてもらおうという趣旨で進められており、通常の倍以上の試合数が行われる。



写真8 防衛大学校の選手に指導を行う様子

⑤その他特別研修

フルレグランプリ パリ国際大会

2月26～28日

エベグランプリ パリ国際大会

5月11日～13日

世界選手権大会（ロシア サンクトペテルスブルク）

9月28日～10月12日



写真9 ミニム大会では公平期するため半数以上の審判がドイツ人

(3) 研修後

今回の研修を終え、私の今後の方向としては、フェンシングにおける指導方法の統一性を課題としなければならないと痛感した。現在フェンシング競技の国内の指導者は、自分自身が受けた指導と自分の経験をもとに指導を組み立てているため、指導に統一性がなく、指導を受ける選手たちは指導者がかわるたびにその指導方法に合わせた技術をつけなければならない。また、競技中の指示についても、一方の指導者が良いと言って選手が行った事をまったく否定してしまうような指示をだしてしまうこともあり、選手はどの指示を信じてよいのか、疑問を抱いてしまう事が見受けられる。

フランスにおいては、今回の研修のように基本的な指導方法には統一性があり、それに従い、指導者が学んでいることから、一貫した指導方法が確立されており、指導者の指導方法に大きな隔たりはあまりなく、そのぶん、指導者への不信感もあまりない。

(4) 終わりに

最後に1年間、日本オリンピック委員会のサポートのお陰でフランスでの研修を充実したものにすることができました。今後は、この研修中にできた、コネクションを有意義に使い日本のスポーツ界そして、フェンシング競技の為に尽くしていきたいと思えます。ありがとうございました。



# スポーツ指導者海外研修事業実施要項

## 1. 趣旨

本会加盟団体に所属している新進気鋭の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員（以下「海外研修員」という）として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者として育成する。

## 2. 海外研修員の種類と研修期間

- (1) 海外研修員は長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）とする。
- (2) 海外研修員は、原則として1ヶ所において集中的に研修するものとする。

## 3. 海外研修員としての条件

海外研修員は、次の条件を全て満たしている者でなければならない。

- (1) 帰国後すぐに、本会の強化スタッフとして推薦でき、競技団体における指導者として活躍できること。
- (2) 渡航先の研修施設の受け入れの保証があること。
- (3) 勤務先等の所属長より渡航の承諾を受けていること。
- (4) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること。
- (5) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること。

## 4. 海外研修員候補者の選考

- (1) 本会は本会ならびに本会加盟団体を対象に、海外研修員にふさわしい者（以下「候補者」という）を募集する。
- (2) 前項により当該団体（本会含む）が候補者を推薦する場合には、別に細則で定める海外研修員候補者推薦書を本会に提出するものとする。

## 5. 海外研修員の決定

- (1) 本会は前項の推薦書に基づき書類選考ならびに面接の上、海外研修員を正式決定するものとする。
- (2) 海外研修員は、別に細則で定める誓約書及び海外研修計画書を本会に提出しなければならない。
- (3) 決定後、出発まで各自語学研修を行う。

## 6. 海外研修員に支給する経費

海外研修員に対する経費は、別に細則で定める要領で支払うものとする。

## 7. 海外研修状況の報告

海外研修員は3ヶ月毎に別に細則で定める研修状況報告書を本会に提出しなければならない。

## 8. 海外研修の中止

本会は海外研修員が本要項に違反したり、不適当な行為があったときは、その研修をとりやめ、帰国を命じることができるものとする。

## 9. 海外研修報告書の提出

海外研修員は、帰国日より1ヶ月以内に別に細則で定める研修報告書を提出しなければならない。

## 10. その他

- (1) 海外研修員は帰国後、本会の開催する諸事業において研修報告を行う。
- (2) その他、海外研修員の派遣に関し必要な事項については別に細則で定めるものとする。

- \*平成12年4月1日 一部改訂
- \*平成14年4月1日 一部改訂
- \*平成16年4月1日 一部改訂
- \*平成18年11月1日 一部改訂

## スポーツ指導者海外研修事業 研修員一覧

競技／年度	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4
陸上競技	沢木啓祐	宮川千秋	鬼塚純一	村木征人	室伏重信		永井 純		宮下 憲		吉田雅美			
水泳	*田口信教	松井 守	宮原利幸 二木広幸				元好三和子			高橋繁浩	高橋繁浩 坂本 弘	中森智佳子	*田中 京	
サッカー	森 考慈		松本育夫			田村 脩		山口芳忠					田嶋幸三	
スキー	*笠谷幸生 *富井澄博					古川年正					*八木弘和		北島光則	
テニス		本村 行									田村伸也			
ボート														
ボクシング									荻原千春					
バレーボール			古沢久雄		荒木田裕子	荒木田裕子								*田中幹保
体操		監物永三		北川淳一					*具志堅幸司			加納弥生	秋山エリカ	
バスケットボール	西尾末広	田中徹雄												
スケート					入沢孝一									
レスリング	*市口政光			藤本英男		富山英明				高田裕司	宮原厚次			
セーリング		松山和興												
ウェイトリフティング	福田 弘		*山下 修			*細谷治朗					三宅義信			
ハンドボール	早川清孝		樫塚正一											田口 隆
自転車														
卓球										須賀健二			前原正浩	
相撲														
馬術									石黒健吉					
フェンシング			*藤沢義彦											
柔道	中村良三		重岡孝文		柏崎克彦			山下泰裕			細川伸二		松岡義之	山口 香
バドミントン				関根義雄							蘭 和真			
ライフル射撃	栗田俊昭		*香西俊輔					市村 忠						
剣道	巽 申直	志沢邦夫												
近代五種			富安一朗											
ラグビーフットボール				水谷 真										
カヌー		本田宗洋					福里修誠							
空手道			真野高一									西村誠司	佐久本嗣男	
アイスホッケー														
なぎなた	田中ミヤ子													
ボブスレー・リュージュ			市橋善行								鈴木省三			
野球														筒井大助
武術太極拳													桑原典子	
トライアスロン														
合計	13	8	13	5	4	5	3	3	4	3	10	3	8	4

※合計数は延人数

※競技団体名の網掛けは非オリンピック競技

※氏名の前の\*は長期

平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	計
	青戸慎司		内田孝男		*土江寛裕				吉田孝久	近野義人		今村文男			14
	緒方茂生	緒方茂生		鈴木大地					岩崎燕子	林 享		*立花美哉		*稲田法子	15
野地照樹										木村孝洋					7
		*佐藤 晃				菅野範弘		斗澤由香子	斗澤由香子				*工藤昌巳	佐々木耕司	10
			西野真一		米沢 徹				*植田 実				谷澤英彦		6
		杉藤洋志	杉藤洋志												1
					本 博国										2
				佐藤浩明							山田晃豊		松本 洋		6
		梶谷信之		瀬尾京子	瀬尾京子	三浦華子	*畠田好章		菅原リサ	*松永里絵子	橋口美穂	原田睦巳			13
															2
							青柳 徹	青柳 徹	和田貴志	和田貴志					3
	*佐藤 満		赤石光生						嘉戸 洋						8
						松本真也									2
															4
		東根明人		松井幸嗣		玉村健次		*田中 茂				*山田永子			8
		大門 宏													1
							渡辺理貴			河野正和					4
齋藤一雄															1
*後藤浩二郎															2
													岡崎直人		2
中西英敏			田辺陽子	岡田弘隆	持田達人	増地千代里	金野 潤	長井淳子	中村行成	植崎教子	中村兼三	阿武教子			18
															2
金坂広幸						*藤井 彌		三野卓哉							6
															2
															1
		勝田 隆				山本 巧									3
															2
成田寛志															4
清野 勝										坂井寿如					2
															1
	栗山浩司														3
							小島啓民								2
				二宮秀夫				神庭裕里							3
								佐藤吉朗							1
7	4	7	4	7	5	7	5	7	8	8	4	4	4	2	161

## スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
1	田口 信教	54年長期	水泳(競泳)	昭和54年10月24日 ～昭和56年10月31日	アメリカ インディアナ州 ブルーミントン	インディアナ大学 ジェームズ・E・カンシルマン	競泳の指導技術の理論と実践
2	市口 政光	54年長期	レスリング (グレコローマン)	昭和54年9月20日 ～昭和56年9月18日	アメリカ ウイスコンシン	ウイスコンシン大学 ウィリアム・P・モーガン	レスリング競技の運動構造と 技術分析に関する比較研究
3	笠谷 幸生	54年長期	スキー(ジャンプ)	昭和54年11月29日 ～昭和56年12月3日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 ジャンプコース 養成コース	ジャンプ競技におけるコーチング トレーニング法の修得
4	富井 澄博	54年長期	スキー(アルペン)	昭和54年9月5日 ～昭和56年5月15日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 アルペンコーチ 養成コース	滑降競技における運動機能技術 分析に関する比較研究
5	森 孝慈	54年短期	サッカー	昭和54年11月21日 ～昭和55年11月20日	ドイツ ケルン	西ドイツ ブンデス フットボールリーグ IFCケルン	ナショナルコーチにふさわしい 知識の習得、指導実践の現地研修
6	沢木 啓祐	54年短期	陸上競技(中・長距離)	昭和54年9月16日 ～昭和55年7月7日	アメリカ オレゴン州	オレゴン大学 オレゴントラッククラブ	米国における中・長距離 コーチング法の修得
7	早川 清孝	54年短期	ハンドボール	昭和54年10月11日 ～昭和55年9月25日	ドイツ ケルン	ケルン ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	西ドイツハンドボール組織のあり方 選手育成・ナショナルチームの指導体制
8	西尾 末広	54年短期	バスケットボール	昭和54年9月18日 ～昭和55年9月13日	アメリカ レキシントン	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールについての コーチング論の研修
9	福田 弘	54年短期	ウエイトリフティング	昭和54年11月5日 ～昭和55年10月30日	アメリカ ロサンゼルス	ロサンゼルス マーベリッククラブ他	ウエイトリフティングの理論 育成コーチ・システム
10	物故 栗田 俊昭	54年短期	ライフル射撃	昭和54年12月5日 ～昭和55年11月24日	ドイツ ヴァイスバーデン	西ドイツ ヴァイスバーデン射撃学校	射撃技術の修得・コーチ学 トレーナー課程の研修
11	中村 良三	54年短期	柔道	昭和54年10月6日 ～昭和55年10月30日	フランス パリ	フランス柔道連盟	外人選手の特性への対応策 コーチング学の研修
12	巽 申直	54年短期	剣道	昭和54年10月18日 ～昭和55年9月10日	イギリス ロンドン	ネリキ道場 英国剣道連盟	英国人の剣道観に関する実態調査
13	田中 ミヤコ	54年短期	なぎなた	昭和54年10月18日 ～昭和55年10月18日	アメリカ ロサンゼルス	アメリカ なぎなた連盟他	アメリカにおける武道(スポーツ)の 動向等調査
14	監物 永三	55年短期	体操	昭和55年10月30日 ～昭和56年10月24日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	体操競技のコーチング 体操競技国際公認用語の習得
15	松井 守	55年短期	水泳(水球)	昭和55年10月17日 ～昭和56年10月16日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー ブタペスト B. V. S. Cクラブ	水球の技術研修
16	松山 和興	55年短期	ヨット	昭和55年11月15日 ～昭和56年11月12日	イギリスワイト島	英国ナショナル・ セイリングセンター 王立ヨット協会	ヨット・コーチ学の研修・選手強化 施設、方法の調査
17	本田 宗洋	55年短期	カヌー	昭和55年11月11日 ～昭和56年12月10日	ドイツ デュイスブルグ	西ドイツスポーツシューレ 西ドイツカヌー協会	カヌーの漕法および指導法
18	田中 徹雄	55年短期	バスケットボール	昭和55年10月15日 ～昭和56年10月15日	アメリカ ケンタッキー	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールコーチ指導法 ウエイト・トレーニング他
19	宮川 千秋	55年短期	陸上競技(短距離)	昭和55年11月8日 ～昭和56年9月20日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ヘイワード	陸上競技における指導法 (特に短距離走について)
20	本村 行	55年短期	テニス	昭和55年11月5日 ～昭和56年11月4日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス他	テニス指導法(特にジュニアの指導法)
21	志澤 邦夫	55年短期	剣道	昭和55年12月26日 ～昭和56年12月27日	オーストラリア シドニー他	オーストラリア剣道連盟	オーストラリアの剣道実態調査 コーチ法の研修
22	香西 俊輔	56年長期	ライフル射撃	昭和56年11月15日 ～昭和58年11月15日	アメリカ テキサス	ラニー・パッシュャム射撃学校	射撃技術の研修 メンタル・マネージメント・プログラムの研修
23	藤澤 義彦	56年長期	フェンシング	昭和56年8月2日 ～昭和58年8月1日	フランス パリ	国立スポーツ研究所 (I. N. S. E. P)	フェンシング基礎技術、競技規則 審判技術指導法等の研修
24	山下 脩	56年長期	ウエイトリフティング	昭和57年1月29日 ～昭和59年1月28日	ドイツ ミュンヘン	ナショナルスポーツセンター バイエルン州ウエイトリフティング連 盟	ウエイトリフティング理論、育成システム クラブ組織、コーチングシステム
25	古沢 久雄	56年短期	バレーボール	昭和56年12月15日 ～昭和57年10月13日	ブルガリア ソフィア	ソフィア体育大学 ブルガリアバレーボール連盟	バレーボール指導法の体系とスポーツ 社会学理論およびゲーム分析
26	鬼塚 純一	56年短期	陸上競技 (混成競技)	昭和56年9月10日 ～昭和57年9月11日	アメリカ カリフォルニア州	カリフォルニア州立大学 ロングビーチ校	混成競技における技術水準および競技水 準向上に関する具体的方法論の研修
27	宮原 利幸	56年短期	水泳(水球)	昭和56年10月25日 ～昭和57年10月31日	アメリカ カリフォルニア州	アメリカ水球 ナショナルチーム	水球競技におけるコーチ学の研修と技術 の研修
28	二木 廣幸	56年短期	水泳(飛込)	昭和56年10月13日 ～昭和57年10月2日	アメリカ カリフォルニア州	ミッションピエホ・スイム・クラブ マイアミ大学	飛込技術の修得およびエージ・グループ の指導法の研修
29	松本 育夫	56年短期	サッカー	昭和56年10月9日 ～昭和57年10月8日	ドイツ ケルン	西ドイツサッカー協会 I. F. C. ケルン	西ドイツにおけるジュニア選手の育成とそ の方法
30	檜塚 正一	56年短期	ハンドボール	昭和56年10月13日 ～昭和57年9月9日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	ナショナルプレーヤーの指導内容と指導 体系、クラブチームシステム等研修
31	富安 一郎	56年短期	近代五種	昭和56年9月1日 ～昭和57年8月31日	アメリカ テキサス州	サンアントニオ近代五種トレーニン グ・センター	選手強化策の現状把握、ジュニア底辺の 普及対策 指導者養成の実態調査
32	物故 真野 高一	56年短期	空手道	昭和56年11月25日 ～昭和57年11月25日	アメリカ ニューヨーク州	コロンビア大学体育学部 全米空手道連盟	競技力向上に関する研究(体力・技術) 空手におけるパワー、体力向上のための 理論と実践
33	市橋 善行	56年短期	ボブスレー	昭和56年11月10日 ～昭和57年11月10日	スイス サンモリッツ他	スイスボブスレー連盟 イタリア・コルチナ ボブスレー製造メーカー	ボブスレー競技、技術向上のための実技 研修 ボブスレー機の修理調整研修

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
34	重岡 孝文	56年短期	柔道	昭和56年12月3日 ～昭和57年12月2日	ドイツ ケルン	西ドイツ柔道連盟 ドイツ体育大学 (D. S. H. S)	ヨーロッパ各国の指導体制、トレーニング 方法の研究、選手強化対策・ヨーロッパ選 手権大会の研修と分析
35	村木 征人	57年短期	陸上競技(跳躍)	昭和57年10月21日 ～昭和58年10月14日	アメリカ サンディエゴ	カルフォルニア州 サンディエゴ大学	跳躍競技の技術研修
36	北川 淳一	57年短期	体操	昭和57年9月1日 ～昭和58年9月2日	カナダ トロント	ヨーク大学 カナダ体操協会	体操競技の技術水準向上のための指導 法研修
37	藤本 英男	57年短期	レスリング (グレコローマン)	昭和57年10月14日 ～昭和58年10月15日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー レスリング協会	グレコローマンスタイルの高等技術の修得 技術分析と実践での応用トレーニング法の 研究
38	関根 義雄	57年短期	バトミントン	昭和57年12月1日 ～昭和58年11月29日	イギリス ロンドン	ウインブルドン スカッシュ&バトミントンクラブ	世界トッププレイヤーの強化方法および ジュニア対策についての調査研究
39	水谷 眞	57年短期	ラグビーフットボール	昭和57年9月2日 ～昭和58年10月29日	イギリス ロンドン	イングランド ラグビー協会	戦法、技術論、およびコーチ学
40	入澤 孝一	58年短期	スケート(スピード)	昭和59年2月20日 ～昭和60年3月19日	ノルウェー オスロ	ノルウェースケート連盟 オスロ大学	ヨーロッパスピードスケートの強化体制およ びコーチングの研修
41	柏崎 克彦	58年短期	柔道	昭和58年5月1日 ～昭和59年4月7日	イギリス ロンドン	BUDOKWAI イギリス柔道連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道技術お よびトレーニング研究
42	室伏 重信	58年短期	陸上競技(投てき)	昭和58年10月16日 ～昭和59年10月4日	アメリカ ロサンゼルス	カリフォルニア大学 ロサンゼルス	アメリカ投てき選手を中心としたトレーニ ングおよび技術研究
43	荒木田 裕子	58年短期 59年短期	バレーボール	昭和58年10月12日 ～昭和60年10月30日	スイス ドイツ	スイスバレーボール連盟 西ドイツバレーボール連盟	ヨーロッパ諸国のバレーボール戦術 技術 研修と情報収集
44	細谷 治朗	59年長期	ウエイトリフティング	昭和60年1月15日 ～昭和62年1月10日	ハンガリー ブタペスト	タバニアスポーツクラブ ハンガリーナショナルチーム	ウエイトリフティング理論、クラブ組織論、育 成システム、コーチシステム
45	富山 英明	59年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和59年12月16日 ～昭和60年12月15日	アメリカ アイオワ州	アイオワ州立大学	レスリング競技のコーチ学
46	田村 脩	59年短期	サッカー	昭和59年9月19日 ～昭和60年9月24日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー大学他	サッカーの指導方法および実践
47	古川 年正	59年短期	スキー(アルペン)	昭和59年10月25日 ～昭和60年10月21日	アメリカ バーモント	アメリカ・スキー ナショナルチーム	アルペン競技における運動構造と技術分 析
48	本間 三和子 (旧姓:元好)	60年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミ ング)	昭和60年8月15日 ～昭和61年8月23日	カナダ カルガリー	アクア・ベル スイミングスクール カルガリー大学	シンクロナイズドスイミングのコーチ法
49	永井 純	60年短期	陸上競技(中距離)	昭和60年11月16日 ～昭和61年11月15日	オーストラリア メルボルン	メルボルン大学	陸上競技のコーチング法
50	福里 修誠	60年短期	カヌー	昭和60年10月8日 ～昭和61年10月3日	ドイツ デュセルドルフ	西ドイツカヌー協会	カヌーの指導法と双方漕法
51	山下 泰裕	61年短期	柔道	昭和61年8月25日 ～昭和62年8月26日	イギリス ロンドン	イギリス柔道連盟	英国及びヨーロッパ各国の柔道強化対策 と指導法
52	山口 芳忠	61年短期	サッカー	昭和61年10月24日 ～昭和62年10月30日	ドイツ ミュンヘン	西ドイツサッカー協会 F. C. バイエルン ミュンヘン	西独プロサッカーにおける指導方法及び ゲームの戦い方
53	市村 忠	61年短期	ライフル射撃	昭和61年11月9日 ～昭和62年11月8日	ドイツ ヴュースターデン	西ドイツ射撃協会 国立射撃学校	ライフル射撃における力学及び心理学的 要素についての個人間の差異の解析に関 する研究
54	具志堅 孝司	62年長期	体操	昭和62年9月17日 ～平成元年9月4日	ドイツ チュービンゲン	チュービンゲン大学	体操競技の指導方法
55	萩原 千春	62年短期	ボクシング	昭和62年10月1日 ～昭和63年10月5日	アメリカ クラマスフォール	オレゴン工科大学	アメリカにおけるボクシングのトレーニ ング法
56	宮下 憲	62年短期	陸上競技(障害)	昭和62年8月26日 ～昭和63年8月29日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学	ハードル種目に関する技術・トレーニ ング方法論の研究
57	石黒 建吉	62年短期	馬術	昭和62年11月12日 ～昭和63年11月12日	イギリス ウィストン	アッジロープファーム トレーニングセンター	人馬の育成・審判員、翻訳、乗馬育成に 関する研修・調査
58	高橋 繁浩	63年短期 元年短期	水泳(競泳)	昭和63年10月14日 ～平成2年9月16日	アメリカ コロラドスプリングス	コロラドスプリングス スポーツ科学研究所	運動生理学を中心に水泳の科学的トレー ニング及びコーチングについて
59	須賀 健二	63年短期	卓球	昭和63年10月13日 ～平成元年10月8日	イギリス ヘスティング	国際卓球連盟	卓球コーチ学研修及び国際卓球連盟に ついて
60	高田 祐司	63年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和63年11月5日 ～平成元年10月26日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア大学	レスリングのトレーニング方法、指導法及 び科学性について
61	八木 弘和	元年長期	スキー	平成元年11月11日 ～平成3年9月18日	オーストリア ザールフェルデン	オーストリア スキー連盟	ジャンプ一流国の強化システムとトレー ニング方式の研修
62	物故 吉田 雅美	元年短期	陸上競技(やり投)	平成元年9月15日 ～平成2年9月14日	アメリカ シアトル	ワシントン大学	投てき競技者に必要な基礎的トレーニ ング法、栄養学、素材発掘の要点等の研修
63	坂本 弘	元年短期	水泳(競泳)	平成元年10月25日 ～平成2年10月24日	アメリカ コーバリス	オレゴン州立大学	競技者の指導テクニック及び泳法テク ニック
64	田村 伸也	元年短期	テニス	平成元年10月3日 ～平成2年10月2日	アメリカ フロリダ	Harry Homman Tennis Camp	テニスコーチ学の全般についての研修
65	宮原 厚次	元年短期	レスリング	平成元年11月1日 ～平成2年10月31日	ドイツ フランクフルト	西ドイツ レスリング協会	グレコローマンスタイル技術研修及びコー チ学研修
66	三宅 義信	元年短期	ウエイトリフティング	平成元年11月6日 ～平成2年11月2日	アメリカ サンフランシスコ	アメリカ ウエイトリフティング協会	ウエイトリフティングのコーチ学、スポー ツクラブ組織におけるシステムと指導方法、軍 隊における選手指導とそのシステム

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
67	細川 伸二	元年短期	柔道	平成元年11月4日 ～平成2年11月3日	フランス ハリ	フランス柔道連盟	フランスを中心としたヨーロッパにおける科学的トレーニングの理論を含む選手強化対策の現状と比較検討及び社会体育としての普及発展状況とその指導方法について
68	蘭 和真	元年短期	バドミントン	平成元年10月10日 ～平成2年10月9日	イギリス ロンドン	英国バドミントン協会	イギリスを中心としたヨーロッパ各国の選手強化策、特にオリンピック対策(体制、組織、方法)の調査
69	鈴木 省三	元年短期	ボブスレー	平成元年12月10日 ～平成2年12月9日	カナダ カルガリー	カルガリー大学	医・科学的サポートの現状、選手育成システム、トレーニング計画と年間計画
70	加納 弥生	2年短期	体操	平成2年9月26日 ～平成3年9月19日	アメリカ	ユタ大学	体操競技の指導方法(コロログラフィー)と選手育成システム
71	西村 誠司	2年短期	空手道	平成2年11月1日 ～平成3年10月31日	アメリカ シアトル	アメリカ空手道連盟	アメリカ大陸の空手道近代技術の研究
72	水野 智佳子 (旧姓:中森)	2年短期	水泳(競泳)	平成2年10月27日 ～平成3年10月26日	アメリカ コロラドスプリングス	USOCスポーツ科学研究所	競技者の泳法及び指導法
73	田中 京	3年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成3年9月12日 ～平成5年9月11日	アメリカ	Walnut Creek Aquanauts Synchronized Swimming・Club	ウォールナットクリークでの実践トレーニング方法及びコーチング研修他
74	秋山 エリカ	3年短期	体操(新体操)	平成3年10月5日 ～平成4年8月15日	ロシア	Р е т н о й В о к з а л ( Д и н а м о ) М о с к в а	新体操の指導方法及びソビエトにおける選手育成システムの研修
75	田嶋 幸三	3年短期	サッカー	平成3年10月7日 ～平成4年9月27日	ドイツ イタリア	サンブドリア ジェノバ他	サッカー選手の一貫指導、特に10～18歳迄のトップ選手の指導システムの研修
76	松岡 義之	3年短期	柔道	平成3年11月8日 ～平成4年11月7日	アメリカ	アメリカ柔道連盟(VSJF)他	アメリカにおける科学的トレーニング理論・方法を含む選手強化対策の現状と比較検討。社会体育としての柔道の普及発展状況とその指導方法について研修
77	前原 正浩	3年短期	卓球	平成3年9月16日 ～平成4年9月15日	イギリス	国際卓球連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ各国卓球協会の指導体制、強化体制、トレーニング方法の研修
78	勝部 典子	3年短期	武術太極拳	平成3年11月27日 ～平成4年11月26日	中国 北京	北京体育学院	武術競技「南拳」の競技技術及びコーチングメソッドを北京市、中国武術研究会にて研修
79	佐久本 嗣男	3年短期	空手道	平成3年11月3日 ～平成4年11月2日	ドイツ	ドイツ トレーナーアカデミー他	ヨーロッパにおける空手道近代トレーニングの実態を視察調査、研究するとともにその指導法の研修
80	北島 光則	3年短期	スキー(コンパインド)	平成3年6月20日 ～平成4年6月19日	ノルウェー	ノルウェー スキー連盟他	ノルデックコンパインド競技指導技術の研究とコーチングをノルウェーナショナルチームにおいて研修
81	田中 幹保	4年長期	バレーボール	平成4年9月20日 ～平成6年8月15日	アメリカ イタリア	アメリカ ナショナルチーム イタリアプロリーグ他	世界最強イタリアチームの技術、戦術の研究と修得 イタリアリーグの運営システムの研究、アメリカのスポーツ医科学から見た選手強化策
82	田口 隆	4年短期	ハンドボール	平成4年11月16日 ～平成5年11月15日	ドイツ	ケルン体育大学他	ヨーロッパでのトレーニング指導方法、理論の研修及び新戦術の研究
83	山口 香	4年短期	柔道	平成5年2月15日 ～平成6年2月14日	イギリス	ハイウイカム柔道センター	イギリス柔道の強化の実態他
84	筒井 大助	4年短期	野球	平成4年8月31日 ～平成5年8月30日	アメリカ	ジョージア南大他	アメリカ式ベースボールの考察
85	野地 照樹	5年短期	サッカー	平成5年12月8日 ～平成6年12月7日	イギリス	イブスウィッチ フットボールクラブ	イングランドサッカーのコーチング イングランドサッカーの指導者養成
86	齋藤 一雄	5年短期	相撲	平成5年10月3日 ～平成6年10月2日	オーストラリア	オーストラリア相撲連盟	オーストラリアのタレント発掘方法及びジュニアからトップまでの選手育成システム、および体力強化の実情等についての研修
87	中西 英敏	5年短期	柔道	平成5年12月21日 ～平成6年12月20日	イギリス	エジンバラクラブ	英国および欧州を中心に、欧州柔道の技術と指導法の研究および指導体制、強化体制ならびにトレーニング方法の研修(強化現狀把握・指導体系・練習体系・強化システム)
88	金坂 広幸	5年短期	ライフル射撃	平成5年10月31日 ～平成6年10月30日	ドイツ	U、Sオリンピック シューティングセンター	エア・ライフル、スモール・ライフル射撃の指導技術およびメンタルトレーニング
89	成田 寛志	5年短期	空手道	平成5年10月23日 ～平成6年10月22日	アメリカ	ジョージタウン大学	選手強化法を含むスポーツ医学全般の研修 空手道における動作の分析 脊椎のスポーツ傷害の診断と治療の研修
90	清野 勝	5年短期	アイスホッケー	平成5年8月26日 ～平成6年8月25日	カナダ	カルガリー・フレイムス(NHL)他	カナダナショナルチームのスタッフとして、アイスホッケーのコーチ学、心理学、技術の習得
91	後藤 浩二郎	5年長期	馬術	平成5年11月18日 ～平成7年11月17日	フランス ル・マン	ル・マン乗馬クラブ他	総合馬術競技に係わる選手の育成と競技馬匹の調教
92	青戸 慎司	6年短期	陸上競技	平成6年11月7日 ～平成7年11月6日	アメリカ コロラド	コロラド大学 ボルダール校	陸上競技、主として短距離走のトレーニングについて研修し実践的にトレーニングを積み競技力向上のための指導法を研究する
93	栗山 浩司	6年短期	リュージュ	平成6年10月16日 ～平成7年10月15日	ドイツ	ドイツ ボブスレー・リュージュ連盟 (DBSV)	リュージュ競技の科学的なトレーニングシステムの現状、ジュニア選手の発掘および選手育成プログラムについて
94	緒方 茂生	6年短期 7年短期	水泳	平成6年11月14日 ～平成8年11月22日	アメリカ ミシガン州他	ミシガン大学 アメリカ水泳連盟他	アメリカの水泳とコーチングの実習
95	佐藤 満	6年長期	レスリング	平成6年11月17日 ～平成8年11月16日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア州立大学	アメリカレスリング協会のシステムの研究 トレーニング指導法及び処方の研究 レスリング技術の研究
96	梶谷 信之	7年短期	体操	平成7年9月1日 ～平成8年8月29日	アメリカ サンフランシスコ	スタンフォード大学	体操競技の指導方法について 選手育成システムについて
97	東根 明人	7年短期	ハンドボール	平成7年8月30日 ～平成8年8月29日	ドイツ ライプチヒ	ライプチヒ大学	ハンドボール競技におけるトレーニング コーチ方法全般について
98	大門 宏	7年短期	自転車	平成8年2月2日 ～平成9年2月1日	イタリア	スポーツグループエキップ93	ロードレースの新しい技術、高度な指導技術の研究開発 諸外国の競技力の分析・戦術・戦法について
99	勝田 隆	7年短期	ラグビーフットボール	平成7年9月25日 ～平成8年9月24日	イギリス	イングランド・ラグビー フットボール・ユニオン	最新ラグビーとコーチングの理論と実際について ラグビー先進国の強化システムと内容について

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
100	佐藤 晃	7年長期	スキー (スペシャルジャンプ)	平成7年10月25日 ～平成9年10月25日	フィンランド	クオビオ市 ブイヨスキークラブ	フィンランドジャンプトレーニング内容指導法(ジュニア含む)
101	内田 孝男	8年短期	陸上競技	平成8年9月30日 ～平成9年9月25日	オーストラリア	オーストラリア 国立スポーツ研究所(AIS) キャンベラ	各種測定、トレーニングの研修 コーチングの実施研修
102	西野 真一	8年短期	テニス	平成8年10月31日 ～平成9年10月30日	アメリカ	ウィロウツリーテニスクラブ他	アメリカのジュニア育成システムの環境医療とデータの重要性アメリカのテニス界について
103	杉藤 洋志	7年短期 8年短期	ボート	平成7年9月1日 ～平成9年8月31日	カナダ 他	カナダ国立コーチング研修所	コーチングの実践研修
104	田辺 陽子	8年短期	柔道	平成8年11月24日 ～平成9年11月25日	イギリス スコットランド	クサク柔道クラブ	イギリスの柔道強化策及び環境について
105	佐藤 浩明	9年短期	バレーボール	平成9年10月1日 ～平成10年9月28日	オーストラリア キャンベラ市	The Australian Institute of Sport(AIS)	オーストラリア・スポーツ研究所の心理的支援体制の調査
106	赤石 光生	9年短期	レスリング	平成9年10月23日 ～平成10年10月30日	アメリカ アリゾナ州テンペー市	ARIZONA STATE UNIVERSITY	アメリカ合衆国が、世界へ向けたコーチングの実習
107	松井 幸嗣	9年短期	ハンドボール	平成9年10月23日 ～平成10年10月22日	ドイツ ケルン	ドイツスポーツ大学ケルン	ドイツにおけるチーム強化のための練習法・指導法と強化対策の実態及び指導者の育成
108	岡田 弘隆	9年短期	柔道	平成9年10月6日 ～平成10年9月30日	イギリス ロンドン	武道会	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
109	二宮 秀夫	9年短期	武術太極拳	平成9年9月26日 ～平成10年9月25日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種目・武術全般のトレーニング法
110	鈴木 大地	9年長期	水泳	平成10年2月4日 ～平成12年2月3日	アメリカ マサチューセッツ州	ハーバード大学 アメリカ水泳連盟 他	アメリカにおける競泳のコーチングの実習
111	米沢 徹	10年短期	テニス	平成10年10月31日 ～平成11年10月30日	フランス アキテーヌ州 アルカッション市	アルカッションテニスクラブ	フランスの指導法と練習内容の把握、フランスシステムの把握、世界レベルのテニス研究、ヨーロッパテニスの研究
112	瀬尾 京子	9年短期 10年短期	体操	平成9年10月5日 ～平成11年10月4日	アメリカ オクラホマ州 オクラホマ市	Dynamo Gymnastics Club	アメリカでの体操競技における指導方法
113	本 博国	10年短期	ボクシング	平成10年9月8日 ～平成11年9月6日	ウズベキスタン タシケント市	"DINAMO"STADIUM PUSHKIN SQUARE 他	科学的トレーニング、指導法、栄養管理
114	持田 達人	10年短期	柔道	平成10年11月10日 ～平成11年10月31日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	フランスの国立スポーツ、体育研究所の指導体系
115	土江 寛裕	10年長期	陸上競技	平成11年1月15日 ～平成13年1月13日	オーストラリア シドニー・キャンベラ	NSW Institute of Sport, Australian Institute of Sport(AIS)	オリンピック地元開催に向けた強化体制と、競技力向上のためのトレーニング方法の習得
116	藤井 彌	11年長期	ライフル射撃	平成11年10月29日 ～平成13年10月27日	フランス パリ	フランス射撃協会	ジュニア期からの一貫指導システムの研究
117	菅野 範弘	11年短期	スキー(ジャンプ)	平成11年10月3日 ～平成12年10月2日	スロベニア ブレッド市 他	SLOVENIA SMUCARSKI KLUB TRIGLAV KRANJ	スロベニアにおけるスキージャンプの強化システム、トレーニング指導方法、転載におけるコンディショニング
118	三浦 華子	11年短期	体操	平成11年8月10日 ～平成12年8月8日	アメリカ ボイシー市	Bronco Elite Gymnastics Club Boise State University(BSU)	アメリカ体操競技におけるジュニア、大学生の指導方法
119	松本 真也	11年短期	セーリング	平成11年12月20日 ～平成12年12月18日	アメリカ アナポリス	United States Naval Academy	セーリング先進国のアメリカ合衆国におけるコーチング研修及び実態調査
120	玉村 健次	11年短期	ハンドボール	平成11年10月12日 ～平成12年10月10日	スウェーデン イエーテボリ市	IK Savehof Tus Shutterwald	北欧のハンドボール技術におけるチーム強化のための練習法・指導法、コーチング全般
121	増地 千代里	11年短期	柔道	平成11年9月11日 ～平成12年9月12日	イギリス ロンドン	武道会、ハイウィカム柔道センター キャンベラ柔道クラブ	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
122	山本 巧	11年短期	ラグビーフットボール	平成11年6月14日 ～平成12年6月10日	イギリス ケンブリッジ	Cambridge University Rugby Union Football Club 他	ラグビー先進国の強化体制及びコーチングに関する研修
123	島田 好章	12年長期	体操	平成12年10月28日 ～平成14年10月27日	アメリカ カリフォルニア	スタンフォード大学	アメリカにおけるトップ選手への指導法及び練習環境や強化育成方法の研究
124	青柳 徹	12年短期 13年短期	スケート(スピード)	平成12年8月27日 ～平成14年9月12日	オランダ フローニンゲン市	オランダスケート連盟	スピードスケート王国・オランダにおけるコーチングスキルの習得及び選手強化体制の見極め
125	渡辺 理貴	12年短期	卓球	平成12年9月14日 ～平成13年9月9日	イギリス ノッティンガム	イギリス卓球協会 他	ヨーロッパのクラブシステムとコーチング
126	金野 潤	12年短期	柔道	平成12年9月10日 ～平成13年9月9日	アメリカ コロラドスプリングス	アメリカ柔道連盟	USOCでの格闘技グループのコーチング方法アメリカ柔道連盟の強化システム
127	小島 啓民	12年短期	野球	平成12年10月13日 平成13年10月10日	アメリカ キューバ	スタンフォード大学 サンタクララ大学 他	アメリカ大学野球トップのスタンフォード大学チーム、キューバのナショナルチームのコーチング
128	田中 茂	13年長期	ハンドボール	平成13年8月18日 ～平成15年8月7日	スペイン バルセロナ	カタール・ニヤハンドボール協会	スペインのハンドボール技術及び練習法、指導法の習得
129	長井 淳子	13年短期	柔道	平成13年9月24日 ～平成14年9月23日	イギリス バッキンガムシャー	National Judo Academy, Cambelry Judo Club, High Wycombe Judo Centre	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道の現状と選手強化の体制、指導法について
130	三野 卓哉	13年短期	ライフル射撃	平成13年9月17日 ～平成14年8月11日	ドイツ ウィスバーデン	ドイツ射撃協会 ブルガリア射撃協会	仕事と競技を両立することができるシステムの調査、ならびにそのシステムによる選手への指導方法
131	神庭 裕里	13年短期	武術太極拳	平成13年10月19日 平成14年10月18日	中国 北京	北京体育大学	長拳3種及び武術全般のコーチ研修
132	佐藤 吉朗	13年短期	トライアスロン	平成14年1月19日 ～平成15年1月20日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	ASIをトレーニング拠点として活動しているジュニアナショナルチームに帯同

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
133	斗澤 由香子	13年短期 14年短期	スキー	平成13年8月14日 ～平成14年8月28日 平成14年11月5日 ～平成15年12月27日	カナダ ヴィクトリア	National Coaching Institute(B.C)	フリースタイルスキーに関するコーチングの実戦研修
134	植田 実	14年長期	テニス	平成14年12月9日 ～平成17年1月23日 (平成16年7月7日 ～8月28日休止)	スペイン バルセロナ	サンチェス&カサル テニスアカデミー	コーチングの実践研修
135	吉田 孝久	14年短期	陸上競技	平成14年7月27日 ～平成15年7月26日	イギリス レスターシャー	ラフバラ大学UK陸連ハイパフォーマンスセンター(HIPC)	跳躍種目コーチング技能の修得
136	岩崎 恭子	14年短期	水泳	平成14年10月4日 ～平成15年9月30日	アメリカ ロサンゼルス	ミッションビエホ・ナグドーズ・スイミングクラブ	ジュニアコーチングの実戦研修
137	菅原 リサ	14年短期	体操	平成14年8月31日 ～平成15年8月31日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	コーチングの実践研修
138	和田 貴志	14年短期 15年短期	スケート(スピード)	平成14年7月25日 ～平成15年7月24日 平成15年9月1日 平成16年8月31日	アメリカ ソルトレークシティ	ユタ・オリンピックオーバル	コーチング及び強化システム研修
139	嘉戸 洋	14年短期	レスリング	平成14年8月16日 ～平成15年7月21日	ウクライナ キエフ	ウクライナ国立スポーツ専門大学	コーチングの実践研修
140	中村 行成	14年短期	柔道	平成14年8月18日 ～平成15年8月17日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟及びEdinburgh Club	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及び コーチングについて
141	松永 里絵子	15年長期	体操(新体操)	平成15年10月5日 ～平成17年10月4日	カナダ バンクーバー	War Memorial Gymnasium	選手強化育成システム及びコーチングの 実戦研修
142	林 享	15年短期	水泳	平成15年10月16日 平成16年10月15日	アメリカ バークレー	カリフォルニア大学バークレー校	コーチング及びトレーニング理論の研修
143	橋崎 教子	15年短期	柔道	平成15年9月19日 ～平成16年9月18日	アメリカ オマハ	Offutt Air force Base Judo Team	コーチング及びトレーニング方法の研修
144	近野 義人	15年短期	陸上競技	平成16年1月19日 ～平成17年1月18日	アメリカ デービス	カリフォルニア大学デービス校	中距離トレーニング及びコーチング研修、 バイオメカニクス研究
145	河野 正和	15年短期	卓球	平成15年9月23日 ～平成16年9月22日	イギリス ノッキンガム	英国ナショナルトレーニングセンター、イギリス卓球協会	英国及び欧州各国の卓球コーチング システム、クラブ運営システムの研修
146	木村 孝洋	15年短期	サッカー	平成15年8月1日 ～平成16年7月31日	イギリス ロンドン	アーセナル	若手有望選手の指導・育成方法の研修
147	坂井 寿如	15年短期	アイスホッケー	平成15年8月6日 ～平成16年8月5日	カナダ エドモントン	Concordia大学	コーチングの実戦研修
148	山田 永子	16年長期	ハンドボール	平成16年8月1日 ～平成18年7月12日	ノルウェー オスロ	Bekkelaget Sport Club	ハンドボールの指導法、強化システムの研 修
149	中村 兼三	16年短期	柔道	平成16年10月12日 ～平成17年11月23日	イギリス ロンドン	Budokwai柔道クラブ	コーチング、ナショナルチームとの交流
150	橋口 美徳	16年短期	体操	平成16年11月28日 ～平成17年11月30日	オーストラリア ブリスベン	Moreton Bay College	ジュニア選手の育成、ナショナル強化選手 の指導方法、環境施設運営面等の研修 (Moreton Bay Collegeで研修)
151	山田 晃豊	16年短期	バレーボール	平成16年9月29日 ～平成19年9月2日	イタリア ラベンナ	イタリア女子バレーボール・ナショナル ユースチーム(CLUB ITALIA)	世界トップレベルのセリエAを中心に ヨーロッパトップリーグの視察と コーチング、チームプレーの研修
152	立花 美哉	17年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成17年10月13日 ～平成19年11月12日	アメリカ サンタクララ	Santa Clara Aquamaid Synchronized Swim Club	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深い アメリカで指導を中心にスポーツマネジ メントを学ぶ
153	今村 文男	17年短期	陸上競技	平成17年9月9日 ～平成18年9月1日	イタリア サルツォ	Scuola di Marcia e degli sport in Saluzzo	競歩選手におけるトレーニング方法とコー チングに関する研修
154	原田 睦巳	17年短期	体操	平成17年9月13日 ～平成18年9月11日	アメリカ バロアルト	Men's Gymnastics Arrillage Family Center	選手強化に関する指導方法の研修および、 大学組織の競技運営方法の比較の調 査
155	阿武 教子	17年短期	柔道	平成17年8月25日 ～平成18年8月24日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	柔道競技人口が世界一のフランスにおい ての指導方法や他の欧州各国の柔道事 情を学ぶ
156	工藤 昌巳	18年長期	スキー(アルペン)	平成18年5月26日～ 平成20年5月25日帰国予定	オーストリア インスブルック	オーストリアスキーチーム帯同	アルペンスキーコーチングについて学び、 オーストリア国家検定アルペンスキーコー チ資格取得を目指す
157	谷澤 英彦	18年短期	テニス	平成18年11月30日 ～平成19年11月29日	オーストラリア ゴールドゴースト	パットキャッシュインターナショナル テニスアカデミー	ジュニアからプロ選手までの指導方法
158	松本 洋	18年短期	バレーボール	平成18年11月30日 ～平成18年12月27日	ブラジル リオデジャネイロ	Centro de desenvolvimento de Voleibol	ブラジルバレーボールの強化システムとス キル、プロフェッショナルリーグの現状につ いて
159	岡崎 直人	18年短期	フェンシング	平成18年11月20日 ～平成19年11月19日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	トレーニング方法全般の修得およびマネー ジメント
160	佐々木 耕司	19年短期	スキー	平成19年8月26日～ 平成20年8月24日帰国予定	カナダ カルガリー	National Coaching Institute Calgary	コーチング技術、トレーニング方法を習得し施設 を視察。カナダのコーチングシステムやその構築 背景を研究。
161	稲田 法子	19年長期	水泳	平成19年12月16日～ 平成21年12月14日帰国予定	アメリカ アリゾナ フェニックス	Brophy College Preparatory	アシスタントとしてトレーニング方法を学ぶ

※平成20年3月31日現在



**スポーツ指導者海外研修事業  
平成19年度帰国者報告書**

発行日 平成20年3月31日

編集・発行 財団法人 日本オリンピック委員会  
〒150-8050

東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館

TEL03-3481-2230 FAX03-3481-2282

